

IV 調査研究

讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1） 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種

佐藤 竜馬

1. 基本的考え方

1-1. 目的と手順

近年、讃岐の古代史を構築し得るだけの考古資料が蓄積されつつある。発掘調査の進展により、讃岐国府跡の遺構内容と変遷過程が次第に明らかになってきていることを第一に挙げることができよう。また、1980年代の下川津遺跡を嚆矢として、稻木北遺跡や旧練兵場遺跡・岸の上遺跡などの特徴的な古代遺跡の発掘調査も行われ、多面的で立体的な古代地域史の叙述することが可能になってきた。

最もオーソドックスな形での歴史叙述を構成する上で、考古学固有の時間軸の設定（層位的把握、遺構の重複関係、様々な素材の編年を出発点とする）が不可欠になる。当面、その中心的な役割を担うであろう土器編年については1990年代～2000年代初頭に検討作業が行われたが、それらの業績が内包する問題点や課題は以後、十分吟味されることのないまま今日に至っている。本稿では、発掘調査成果にできる限り適切な年代的位置付けを与えることを目的として、古代～中世前半の土器について様相把握を試みる。最終的には系譜関係や型式組列＝形式を踏まえた編年案の提示を目標としているが、さし当たっては特徴的な形式の一定度のまとまりをもって設定できる（つまり発掘現場で判断できる）資料群を一つのまとまり＝「期」として捉え、これら資料群を構成する土器の特徴から、形式的帰属と組列上の細別型式について一定の見通しを示したい。こうした様相把握を経た上で、I～VII期全体を見渡した編年案を提示する。対象とする年代は7世紀中葉から14世紀前半であり、今回の検討はIV・V期（9世紀後葉～11世紀前葉）の供膳器種の様相把握である。当該期を最初に取り上げる理由は、第一に前後に比してこの時期の様相がこれまで十分明らかにされてこなかったこと、第二に讃岐国府跡の発掘調査によってこの時期の遺構が多く検出されるようになり、国府の変容過程を追求するために時間軸設定の作業が急務と見なされること、にある。

以後の検討予定としては、(2) でI～III期の供膳器種の¹様相把握、(3) でI～V期の煮炊・貯蔵器種の様相把握、(4) でVI～VII期の供膳・煮炊・貯蔵器種の様相把握、といった作業を行う。それら様相把握を踏まえた上で、(5) I～VII期の編年案の提示と特質の抽出、を行いたい。

上記（1）～（4）は、編年のための基礎作業である。結論としての編年案の提示に先立って、**1－4.** で述べるように、既に編年の枠組み（I～VII期と古・中・新相の細分）が前提されているのは循環論法のようにも見える。しかし本稿で提示したいのは、土器の系譜関係の推定による型式組列の設定と、その細別期毎の変遷過程の説明であり、大枠としてのI～VII期の設定ではない。I～VII期の設定は、先行研究による当該期の変遷観（片桐1992、佐藤1993・2000a・2003、松本2003、乗松2004）を踏まえた結果によるものであり、そうした枠組みを設定する程度には、当該期の土器について見通しが得られていると考える。もちろん以下の作業によって、I～VII期の区分の指標が訂正される可能性はある。

1－2. 様相把握にあたって 系統・形式・型式、そして焼物の区切り

【何を示すのか】

土器編年自体は、土器の相対的な変化について整理し、それを可視化することによってできるがるメディア（媒体）といえる。したがって、構築される編年案が、検討者の目的や視点を前提とし、それに規制されるのは当然である。共伴関係などの「出土実態」を重視したイメージが示されるのか、そこから抽象化・帰納された変遷に対する原理・原則を構築し示すことに重きを置くのかによって、提示される編年案の姿は大きく異なるであろう。本稿では、なるべく後者を目指したい。

【編年と様式は異質の概念である】

土器の年代的序列である編年作業の方法的概念の一つとして、「様式」概念がしばしば取り上げられる。中谷治宇二郎の先駆的な業績が扱われることもあるが、特に西日本の弥生時代以降の研究では小林行雄の一連の業績が下敷きにされることが多い。小林様式論については、1980～90年代を中心に多くの学史的検討が行われており、ここで触れる余裕はない。指摘しておきたいのは、周知のことではあるが「様式」概念が創出された美術史における「様式」と、考古学研究における「様式」（「土器様式」）との著しい内容の差異である。

美術史における「様式」概念は、ある年代的位置付けがなされた対象物（作品）群のもつ特徴の中から抽出された表徴によって裏付けられる形を取る。年代的位置付けすなわちクロノロジー cronology（編年/年代学）は、「様式」の前提をなすことがあっても、様式が編年のための必須の前提条件となることはない。² H・ヴェルフリン（1864～1945年）が取り組んだルネッサンス様式とバロック様式という様式概念の抽出は、16世紀と17世紀の各世紀の作品群の存在を前提にして行われたのであり、逆ではない。³ クロノロジーは、その淵源である古文書学/年代記からそうであるように、事象の年代的確定のために個別的な特定化・細分化の方向を志向するが、様式

概念は逆に大づかみな総合化によって初めてその有用性を現すといえる。また必ず比較されるべき他者の存在が必要である。様式と翻訳されるstyleに含まれる、「文体/型/種類/流行/芸風/品位」などの言葉は、このことをよく表していよう。美術史における様式概念が、しばしば指摘されるような曖昧模糊、融通無碍なものであるのは、上記事情を背景にしているためでもある。

そもそも「様式」と「編年/年代記」は、目指すものが違う異質な概念と見た方が良いであろう。細かな違いはあるものの、「様式」を編年の方法論としていわば下位概念に位置付けることでは一致する考古学での使用方法は、やはり多くの問題を抱えることになるのではないかと考える。⁴

【古代以降の土器「様式」】

7～14世紀の土器は、「律令的土器（食器）様式」「中世的土器（食器）様式」という名称（概念）が用いられることがしばしばであり、さらには両者の間に「王朝国家的食器様式」が措定されることもある。これらの用語は、当該期の土器編年がなされた上で、その時代的特徴を表すものとして使用されているという点で、「唐古第I～V様式」とは異なる「様式」概念と見ることができる。しかしこれらの「様式」概念には、異なる内容の前提が盛り込まれているように見受けられる。

例えば律令的土器様式においては、第一に、金属器（金器・銀器）を頂点とする大陸的な食器組成の一翼を担い、形態的にも一貫した模倣関係にあるとする点で、この土器「様式」の理解には齊一性が前提とされている。第二には、前記と必ずしも整合しない属性として、「様式」創出を担った中心域とされる畿内における、必ずしも齊一性では括れない同時併存＝共伴関係が前提されている。第一の前提は小林行雄の初期の議論に、第二の前提は唐古編年に結実する後期の小林の考え方方に近いようにも捉えられ、異質な前提が複合しているように受け止められかねない。しかも畿内においてすら、この二つの前提は対象範囲にかなりのゆらぎを伴うと見ざるを得ない。「地方における律令的土器様式」であれば、なおさらである。もっとも提唱者の西弘海が示した内容からすれば、律令的土器様式は事実上、供膳具に限定された狭義の食器様式と見るべきかもしれません、その場合は第一の前提に限定されるかもしれない。宇野隆夫による「律令国家的食器様式」／「王朝国家的食器様式」は概念上、それを意識的に明確化した側面をもつ。

律令/王朝国家的食器様式は、どの程度のゆらぎを許容する概念であろうか。地域を横断して存在が認められる特定の焼物や器種はあるが、①「畿内系土師器」とされるいくつかの器種の欠落、②逆に畿内では僅少な須恵器系の「土師器」＝土師質土器の普遍的存在、③当面系譜関係に不分明さを残す（畿内との系譜関係を保留せざるを得ない）黒色土器杯・碗の存在、といった事象をいかに捉えるか。仮にこれら事象を上記食器様式の構成要素に含まれるとすれば、やはり前記した第二の前提が含まれることになってしまうのではないか。

したがって、ここにおいても「様式」概念は無用の混乱を招く可能性がある。本稿では土器群の特性を示す言葉としては、主体的には「様式」を用いない。わざわざ「様式」という言葉で言

うよりも、それに近い一般的な用語や概念で換言できると考えるからであり、例えば、まとまりとしての表徴に重きを置く場合には「様相」、また併存関係やセット関係などに重きを置く場合には「組成」という用語を用いる。また様相把握を経て組まれた時間的区分の単位については、「期」を用い、それを細分する小単位に「古相/中相/新相」などの呼称を当てたい。なお、それぞれに考古学特有の特殊な意味合いをもたせるつもりはない。

【分類と系統】

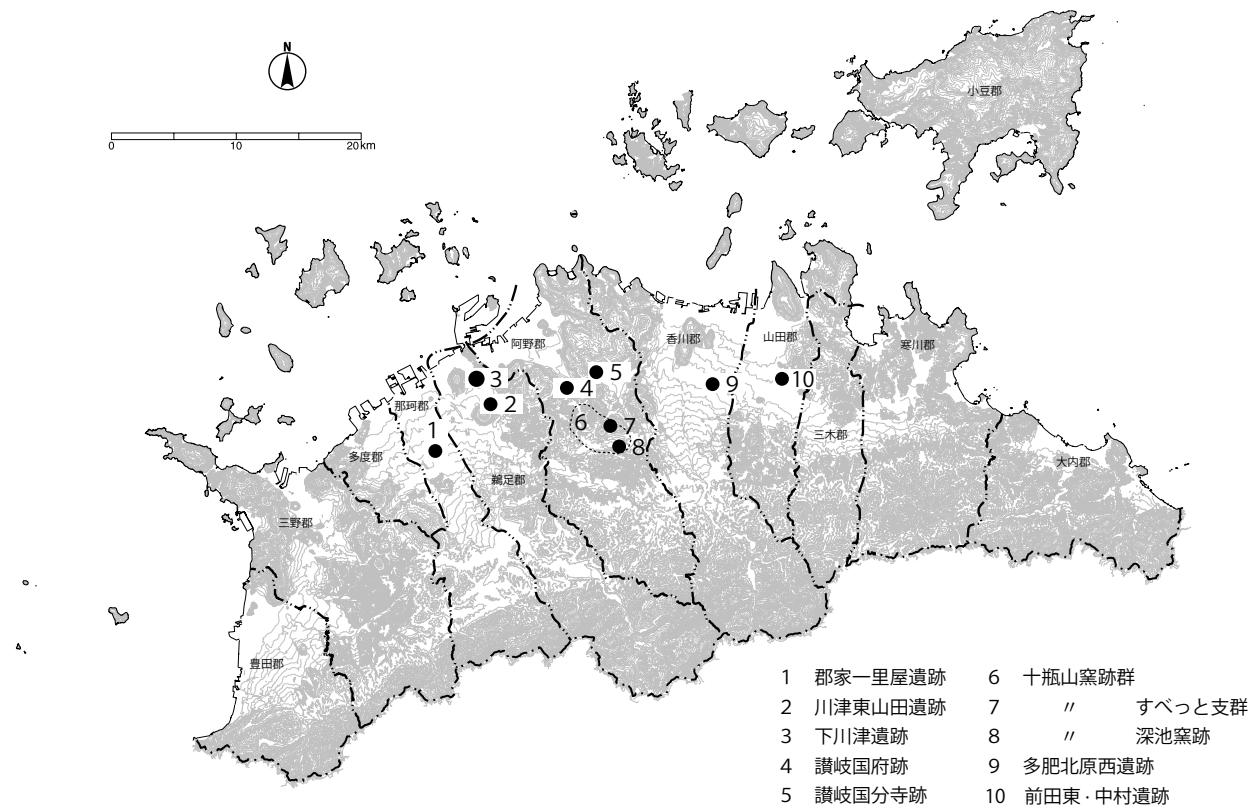
ところで、編年案構築にあたり、分類を入口とするのか、系統関係の把握から入るのか、という悩ましい問題がある。単に区分のテクニックという表層にとどまらない、対象への認識の問題が背景にあると見た方がよい。本稿での土器形式の分類呼称は、十瓶山窯産須恵器の編年案（佐藤1993）と讃岐中央部での中世前期土器編年案（佐藤2000a）で示した分類案に依拠し、今回の検討で新規に加えた形式も上記分類案に付け足す形で示す。これは結果的に上記問題を棚上げにしてきた結果であり、こうした暫定的な使用状況は、到底適切なものとはいえない。⁵

個別の形式・型式の分類に立ち入る以前に、当該期では土器の種別（大区分）そのものについても考える必要がある。

先史考古学と古代以降の考古学（歴史考古学）においては、土器=焼物の区分方法に埋めがたいギャップが存在することは間違いない。生産地と焼成・素材の二つの属性を含意する歴史的概念としての「焼物」を枠組みの前提とするのが中世以降であり、特定の時代に伴う文化要素として時代区分に従わせるのが古墳時代前期以前の土器である。飛鳥～平安時代の土器は、生産地の区分を前提にした土器様相の把握が行われ、かつ焼物の種別を時代区分にリンクさせることを放棄しているという点で、前者の視点の延長にあるといえる。⁶

ところで、「焼物」としての区分が、二つの属性のうち、より近代的な区分である焼成・素材で区切られる（土器・陶器・炻器・磁器）というのも、不動の枠組みとは言い切れない。

「土師器」「須恵器」、さらには「土師質土器」「中世須恵器」「中世陶器」「備前焼」「龜山焼」等々の用語が、そしてそれらを総合する「土器・陶磁器」あるいは「焼物」という言葉とそれに伴う概念や区切りは、現在の我々から見た視点に基づいた形成物である。①それらが生産・使用・廃棄された時点での把握のされ方は、現在とは明らかに異なるであろうし、②現在においてもそれらの言葉は、それを使用する社会集団内においてさえ、状況に応じた使い分けがなされていて揺らぎを伴って使用され、現代社会においては日常語ではあり得ない。この二重の意味で、上記をはじめとする土器・陶磁器に関する概念や区切りは、それらを対象にした考古学的研究の中でしか意味を発揮しないものである。したがって、7世紀中葉の土器に見られる様式的転換前後で、単に焼成の同一性だけで土師器・須恵器が引き続き同じ「焼物」として同時代に認識されていたのかは全く未検証である。また、11～13世紀において焼成が変化する「西村型土器碗」や、14



第21図 遺跡位置図

～16世紀に同一形態の中で焼成のバリエーション（というか焼成への頑なな規範が不在と見た方がよいのかもしれないが）が著しい「楠井産擂鉢」についても、先駆的に前提とされがちな焼成を重視した分類では、その叙述に有用な成果をもたらさないと考える⁷。焼成、という材質（形態を構成する）を構成する視覚的な要素が重視されることで、土器のもつ系譜関係が二の次にされるところに問題がある。

参考になるのが、生物系統学における分類と系統の捉え方である。そこでは「分類学と系統学とは根本的に異質な学問であり、慣習に流されてそれらを同一視することは、双方にとって何の利益にもならないだろう」とする見解が示されており、「第1段階から系統の問題を論じ、その結論をふまえて（必要ならば）つぎの段階として分類を論じる必要があるはずです。たとえ見かけとは同じ形質状態を共有していて、分類群としてまとめられると『分類学的』に認知されたとしても、その形質状態が共有派生的でなく、たんにホモクラシー「非相同、別の祖先に由来する形質の類似、筆者註]だったならば、最初の分類学的認知は系統学的には結果として誤りでしょう⁸」とされる。形態を前提にした分類と、系譜を念頭に置いた分類とでは、結果が異なるのである。考古学においても、編年のための分類体系と、機能や使用方法などを考えるための分類体系は当然異なるはずであり、それを無理矢理整合させる必要はないであろう⁹。

編年という時間軸の設定には、由来関係も適切な形で説明されることが望ましいと考えるので、系譜関係を踏まえた分類が最終的には必要となる¹⁰。最終的には1-1. で示した本稿（5）の段階で系譜を踏まえた形式名に全面的に振り直す予定である。この点、留意されたい。

1－3. 検討対象資料

様相把握の検討対象として抽出した資料群（第20図に分布図）は、様々な出土状況によるものであり、所謂「一括資料」として捉えることができるものは少なく、多くの資料では出土した遺構の性格上、一定の時間幅を見込む必要がある。その存在自体が問題になる形式・型式については、個別に指摘する。とはいっても、2. で述べるような抽出資料群では、形式毎の変化のあり方が比較的よく示されていると考えられ、資料群の様相把握の背景にある変化・不変化を解釈・抽象化して示されるべき編年案の構築に十分寄与するものである。

なお各資料群には、他地域（主に畿内と周辺）からの搬入品が少数ながら伴う。搬入品の存在は、例えば近世と比較するとまだ極めて少ない状況であり、それ自体が地域内での編年構築の主要な対象になることはない。ところで近世陶磁器では、生産地あるいは他地域の動向と比較すると、そのあり方に地域性が見出せる可能性がある（例えば高松城様相7=XⅡ期新相における肥前系磁器端反碗の欠如もしくは僅少）。その反面、陶磁器の長期保有も稀ではない。こうした近世の状況に鑑みると、資料数が皆無か量的に安定しない状況のI～VI期において、国産陶器・輸入陶磁をはじめとする搬入品の流通・保有・廃棄を辿る過程を、単純に把握できないことは想像できる。少なくとも、I～VI期の地域における編年作業では、搬入品の想定年代を先行させた枠組みではなく、在地土器の主体をなす器種や形式を主要対象とする必要があろう。¹¹

1－4. 前近代（I～XⅢ期）の土器様相概観

7世紀中葉から19世紀後葉に至る古代以降の前近代の土器変遷は、現段階で以下のI期からXⅢ期に整理できる。本稿（1）～（5）ではI～VII期が検討対象であるが、I～XⅢ期の概略を、記述する（第22表）。

【I期（7世紀中葉～後葉）】

須恵器・土師器とともに5世紀以来の系譜に代わる新たな一群の出現期であり、両者が併存しつつ交代していく内容をもつ。具体的には、①金属器模倣と見られる須恵器蓋杯、土師器杯の出現、②内面削り、外面ハケ目を多用した薄作りの土師器甕・鍋・羽釜・甌と、これに組み合う移動式甕の出現、などが新たな主要器種である。これと併存する形で、③5世紀代からの系譜で捉えられる合子形の須恵器蓋杯（「古墳時代タイプ」）、④口頸部に文様帶や段などをもつ須恵器甕・ハソウ、など前代的な器種が認められる。また、⑤短脚で椀形の杯部をもつ無蓋高杯、のように畿内・陶邑窯よりも大幅に遅れてこの時期に出現する器種も存在する。新旧器種の交代の具体的な

あり方、あるいは形態変化などに、地域色が強く発現していると評価できよう。¹³

本稿 I 期～II 期古相に相当する讃岐の須恵器について、筆者はかつて 1～4 段階の細分案を提示したことがある。¹⁴ この案では、③が消滅し高台付杯がいまだ出現しないという形での①単独段階（志度末 3 号窯跡等）を想定したが、その後、①・③併存期の中に解消し位置付ける所見が示されており、③単独期→①・③併存期→①単独期（高台付杯も含む）、という形で整理される方向にある。しかし③がどのようにして残存し消滅に至るのか、また高台付杯がどのように出現するのか（台付碗との関係含め）等、今少し吟味を重ねる必要があると考えている。また川津地区遺跡群での畿内系讃岐産土師器の変遷観から、相互に検証されることが望ましいが、そのような資料はいまだ僅少である。いずれにしても、さらなる資料の読み込みと解釈の提示を行いつつ検証されるべき仮説の提示が求められる。このうち I 期に関連するのは①・③併存期であり、古相と新相に 2 分される。細分の指標となるのは、③に見られる回転ヘラ削り調整の有無と口径、①のプロポーションと口径などである。

【Ⅱ期（7世紀末葉～8世紀中葉）】

①須恵器高台付杯（杯 C 形式）の出現・普遍化と畿内系土師器杯・高杯・皿の一定量共伴、②須恵器と共通した形態と成形技法をもつ新たな「土師器」=土師質土器杯の出現、③内面に炭素を吸着させる黒色土器 A 類杯・鉢の少量存在、④ I 期から継続する薄作りの土師器煮炊器種、がこの時期の特徴である。古相・中相・新相に 3 区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯 C I・II 形式、②須恵器皿 A I～III 形式、③土師器杯、④黒色土器の有無、である。

須恵器杯 C 形式は、古相において I 期で出現したカエリ付の蓋（蓋 B 形式）が認められるが、既にカエリの付かないタイプ（蓋 C 形式）も出現しており、中相で後者のみとなる。また I 期で蓋 B 形式を伴っていた平底の杯 B 形式は、この期には無蓋形態となったようであり、中相までは一定量認められる。須恵器は、古相では讃岐の各地域窯製品と広域分布製品（就中、三野窯跡群）の混在が著しいが、中相以降、十瓶山窯製品が主体を占めるようになる。土師質土器杯は、古相もしくは I 期新相で極少量認められる（下川津遺跡第 1 低地帯流路 2）のが初現であり、中相・新相で一定量見られるようになる。

黒色土器は、東北地方でのそれとの形態・技法的類似性を認め、蝦夷集団の西国移配との関係を指摘する見解もあるが、¹⁷ 点的とはいえ瀬戸内から九州にかけて比較的広範囲に分布する黒色土器を蝦夷の移配との関係で説明し切ることができるだろうか。かつて田中琢が見通したような、畿内周辺域を除いた東国と西国との共通性（普遍性）に立った評価が行える可能性はないだろうか。¹⁸ また別の可能性として、畿内系黒色土器の影響を想定する見解もあり、地域における系譜関係の追求・整理が必要な段階に至っているといえる。¹⁹ 土師器杯・皿では、畿内系讃岐産土師器の特徴的なあり方が不明瞭になり、畿内からの搬入品との識別が困難になる。

		抽出資料（消費遺跡）	抽出資料（生産遺跡）
1900	X III	高松城跡西の丸町B地区S X b 01・02	
1850	X II	最新 高松城跡西の丸町B地区S D b 04	
1800		新 高松城跡西の丸町B地区S X b 06・S K b 63	
1750		中 高松城跡西の丸町B地区S X c 13・14	
1700		古 高松城跡西の丸町B地区S A・C区II層、S K b 65	
1600	X I	最新 高松城跡西の丸町B地区S K c 20・21	
1650		新 高松城跡西の丸町B地区S K b 229・170・171・178	
1700		中 高松城跡西の丸町B地区S K b 255	
1750		古 高松城跡西の丸町B地区S K b 192・152	
1800	X	片原町遺跡S D01、東山崎・水田遺跡C地区第1面S D05	
1850		香西南西打遺跡S D03	国分寺楠井遺跡2号窯跡
1900	IX	新 浜ノ町遺跡S X407・300・530、空港跡地遺跡S K c 7	国分寺楠井遺跡1号窯跡
1950		中 浜ノ町遺跡S K212・S P2001	国分寺楠井遺跡3号窯跡、土器溜り2
2000		古 浜ノ町遺跡S K661・S P6011	国分寺楠井遺跡土器溜り1第II層
2050	VIII	新 空港跡地遺跡S D f 48下層、薬王寺遺跡S E 03、川津二代取遺跡S	西村遺跡西村北地区S 5-S K01・N 6-S B03
2100		古 空港跡地遺跡S D f 16上層、前田東・中村遺跡E区S X04、川津二代取遺跡S D 28	西村遺跡川北地区S 33-S
2150	VII	新 空港跡地遺跡S D f 16中層・S D f 19、下川津遺跡S D III71東部、六条・上所遺跡S B03	K01 かめ焼谷2号窯跡、西村遺跡
2200		中 空港跡地遺跡S D f 16下層、東山崎・水田遺跡E区S D03	西村遺跡山原地区S 17-S K16
2250		古 空港跡地遺跡S D f 32、佐古川・窪田遺跡Ⅲ区S E02	K201 赤瀬山2号窯跡、奥下池南窯跡、西村遺跡川北地区N 35-S K25・山原地区S 20-S D01
2300	VI	新 下川津遺跡S D III75中央部上位、川津元結木遺跡S D10第1溝	西村1号窯跡、西村遺跡西村北地区N 2-S K02
2350		中	庄屋池3号窯跡、西村遺跡川北地区N 31-32-S D01
2400		古 下川津遺跡S D III03・05	西村2号窯跡、西村遺跡西村北地区N 3-S K01
2450	V	新 前田東・中村遺跡E区S K04	(未確認)
2500		中 前田東・中村遺跡E区S D19	(未確認)
2550		古 讃岐国分寺跡S K25・26	深池窯跡
2600	IV	新 下川津遺跡S E III04、郡家一里屋遺跡S D13第2層、川津東山田遺跡I区S D3109	かめ焼谷1号窯跡
2650		中 郡家一里屋遺跡I区S D12(新相)	すべつと2・5・6号窯跡
2700		古 多肥北原西遺跡S D0501	すべつと1号窯跡(新相)、同10号窯跡
2750	III	新 貝田岡下遺跡II区南包含層(古相)	すべつと1号窯跡(古相)、十瓶山西2号窯跡
2800		中 讃岐国府跡第2次整地層(第5・6層)	庄屋原4号窯跡
2850		古 空港跡地遺跡S D b 19、讃岐国分寺跡S K830	大師堂池1号窯跡
2900	II	新 本村・横内遺跡S K101	庄屋原3号窯跡、北条池1号窯跡
2950		中 森広遺跡S D7801	池宮神社南窯跡
3000		古 四国学院大学構内遺跡S D01	小谷1号窯跡
3050	I	新 川津一ノ又遺跡S D15中・下層	打越窯跡
3100		古	青ノ山1号窯跡

2015.7.3現在

第22表 I～X III期の抽出資料

【Ⅲ期（8世紀後葉～9世紀中葉）】

①須恵器杯蓋・甕における新たな系譜（蓋CⅢ形式・甕BⅡ形式）の出現、②新たな系譜の黒色土器A類杯・鉢の出現と一定量存在、③新たな系譜の土師器甕D形式、羽釜C形式の出現と普遍化、などを特徴とする。供膳器種を中心にⅠ期で成立した基本形は、この期をもって終了する。またこの期で出現した煮炊器種の新たな系譜は、Ⅵ期まで継続する。

古相・中相・新相に区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯CⅠ・Ⅱ形式、蓋CⅠ～Ⅲ形式、②須恵器皿AⅠ形式などにとどまり、現状では専ら須恵器に拠らざるを得ない。須恵器杯の高台形状や同貼り付け状況、蓋口縁部形態の変化と天井部の回転ヘラ削り調整の有無（量比）、皿の口縁部形態と口径の変化（縮小化）、などの要素である。

【Ⅳ期（9世紀後葉～10世紀前半）】

①須恵器蓋物（蓋杯）のセット関係の解消とそれに連動する高台付杯の激減、②無蓋となった須恵器に共通した形態と成形技法をもつ土師質土器の急速な普遍化、③高台をもつ初現的な黒色土器椀の出現と普及、④Ⅲ期で出現していた甕D形式の頸部に鐸を付す土師器羽釜B形式の出現・普遍化、⑤外反した口縁部をもつ須恵器広口鉢（鉢C形式）の出現、⑥体部外面に格子叩き目を残す須恵器甕BⅡ形式の定型化と、寸胴形の体部をもつ瓶子形の須恵器壺BⅠ・Ⅱ形式の出現・普遍化、⑦京都産を主体とする緑釉陶器椀・皿の一定量伴出、などを特徴とする。Ⅰ期からⅢ期まで基本形が共有された土器様相から大きく転換する期といえる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯BⅢ・Ⅳ・Ⅴ形式、②土師質土器杯AⅠ・Ⅲ・Ⅳ形式、③黒色土器A類椀AⅢ・Ⅳ形式、④土師器羽釜B形式、⑤須恵器甕BⅡ形式・壺BⅠ・Ⅱ形式、である。また単発的存在としてその存否自体が指標となり得る可能性をもつのが、⑥須恵器椀AⅠ・B形式、⑦土師質土器椀BⅠ・Ⅱ形式、である。⑥の須恵器椀B形式は、在地産（十瓶山窯産）と搬入品との識別に留意する必要がある。

【Ⅴ期（10世紀後半～11世紀前葉）】

①須恵器杯皿類の激減、②浅手の土師質土器杯=杯Cの急速な普及、③高い脚台をもつ台付杯の普及、④深椀形の黒色土器椀の出現と普及、⑤厚手粗製の土師器甕EⅠ・Ⅱ形式の出現、⑥近江産を主体とする緑釉陶器椀の少量伴出、などを特徴とする。椀形態においてⅦ期までたどれる系譜が出現した点で、中世的様相への先駆をなす小画期と評価できる。その一方で、十瓶山窯産須恵器はⅣ期の系譜で捉えられ、まだ中世的器種が成立していない。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器杯BⅢ・Ⅳ・Ⅴ形式、②土師質土器杯AⅠ・Ⅲ・Ⅳ形式、③土師質土器杯CⅠ・Ⅱ形式、④土師質土器台付杯、⑤黒色器A類椀AⅡ形式²⁰、⑥黒色土器B類椀AⅣ形式、である。①・②はⅣ期から連続的な変化が追える

ものであるが、①は生産地以外での量的存在が著しく減少する。

【VI期（11世紀中葉～12世紀前半）】

①十瓶山窯産須恵器における平高台椀（椀B形式）の一定量存在、②土師質土器皿B（小皿）の出現・普及、③新たな系譜の土師質土器杯D形式の出現と普遍化、④十瓶山・西村遺跡での生産による黒色土器椀AⅡ形式の定型化、⑤十瓶山窯産中世須恵器の基本をなす鉢D形式、壺C形式、甕C形式の出現、⑥白磁椀IV類を主体とした輸入陶磁の一定量伴出、⑦吉備系土師質土器椀、楠葉型瓦器椀、和泉型瓦器椀・皿などの一定量伴出、などを特徴とする。中世的様相の成立期である。⑥・⑦の事象は、遺跡によってその内容や数量に偏差が認められ、例えば讃岐国府跡では輸入陶磁の数量が多量で白磁皿の比率が高く、港湾施設周辺（高松城下層遺跡）では和泉型瓦器椀の数量が④を大きく上回り、吉備系土師質土器椀が④に伯仲するという傾向が指摘できる。なお、土師器羽釜B・C形式、土師器甕EⅡ形式、土師器移動式竈などの煮炊器種のセットは、この期をもってほぼ消滅するものと思われる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器椀B形式、②土師質土器皿BⅠ～Ⅲ形式、③土師質土器杯DⅠ・Ⅱ形式、④黒色土器椀AⅡ形式、⑤須恵器鉢D形式、⑥須恵器壺C形式・甕C形式、である。

【VII期（12世紀後半～13世紀中葉）】

①西村型土器椀AⅡ形式における須恵質焼成化、②十瓶山窯産須恵器鉢E形式の普遍化、③須恵器系の技法（口頸部・底部叩き出し、回転台調整）により製作された土師質土器鍋A形式の出現・普遍化と、足釜A・B形式の出現、④龍泉窯系青磁椀を主体とする輸入陶磁の一定量伴出、⑤吉備系土師質土器椀・鍋、亀山産須恵器甕、和泉型瓦器椀、東播系須恵器鉢、常滑産陶器鉢・甕の少量もしくは一定量伴出、などを特徴とする。③の事象では、鍋の方が先んじて出現・普遍化するようであり、足釜はこの期ではまだ少数派にとどまる。

古相・中相・新相に3区分される。細分の指標になるのは、①須恵器椀AⅡ形式、②土師質土器皿BⅡ・Ⅲ形式、③土師質土器杯DⅡ形式、④須恵器鉢E形式、⑤須恵器甕C形式、である。

【VIII期（13世紀後葉～14世紀前葉）】

①西村遺跡産の須恵器杯DⅡ形式の普遍化と、須恵器椀AⅡ形式の急速な減少と消滅、②土師質土器足釜A・B形式の普遍化、③龍泉窯系青磁椀を主体とする輸入陶磁の一定量伴出、④吉備系土師質土器椀、亀山産須恵器甕、東播系須恵器鉢、備前窯産陶器擂鉢・甕の少量もしくは一定量伴出、などを特徴とする。④に関連する事象として、和泉型瓦器椀の消滅を大きな変化として挙げ得る。VII期とIX期の間の移行期的な内容であり、いずれかに包含されるとすれば主要器種（土

師質土器皿・杯、須恵器碗）の継続状況からVII期に含めるのが妥当であろう。

古相・新相に2区分される。細分の指標になるのは、①須恵器碗A II形式・杯D II形式、②土師質土器皿B III形式、③土師質土器杯D II形式、④土師質土器鍋A形式、足釜A・B形式、である。

【IX期（14世紀中葉～15世紀前半）】

IX・X期は、古代以降の前近代において最も土器様相が不明瞭な期である。供膳器種において明瞭な変化を伴う型式組列を示してきた碗形態が消滅したことが、その一因である。²¹また、VI期以来盛行してきた土師質土器杯・皿の系譜が途絶し、新たな系譜の土師質土器皿（あるいは浅手の杯）に交代するが、その系譜関係と型式組列が十分に整理されていないことにも原因を求めることがある。²²土師質土器鍋・足釜においても組列を組み立てることは可能だが、供膳器種に比して変化が緩慢な傾向にあるのはVII期以前と変わりない。12～13世紀よりも集落遺跡が長期継続し、遺構出土遺物の年代幅が1世紀を超えることも珍しくない状況もまた、問題を複雑にしている。

とりあえず現段階では、以下のように特徴を整理しておきたい。①土師質土器杯D II形式をより浅手化させた新たな系譜の土師質土器皿（乗松分類杯1・2形式）の出現と普遍化、②土師質土器足釜B形式の主体化と足釜A形式の消滅、③鉄鍋模倣形態である土師質土器鍋B形式の出現・普遍化、④備前産陶器模倣に始まる桶井型土器擂鉢A II・III形式の出現と急速な普遍化、⑤口縁部が肥厚気味に内湾する土師質土器擂鉢の出現・普遍化、⑥備前産陶器模倣を重要な要素とする桶井産土師質土器甕の出現・普遍化、⑦東播系須恵器鉢、亀山産須恵器甕、堺近郊産瓦質甕の一定量存在、⑧備前産陶器擂鉢・壺・甕の普遍化、である。

一応、古相（乗松編年3段階）・中相（乗松編年4段階）・新相（乗松編年5・6段階）に3区分される。上記器種①～⑧が細分の指標になろう。

【X期（15世紀後半～16世紀末葉）】

IX期同様、実態不明の感はあるが、以下の特徴をもつ。①より浅手になった土師質土器皿（乗松分類杯7形式）の出現・普遍化、②口縁部・鍔部が突帯状に縮小した土師質土器足釜C形式の出現・普遍化、③足釜C形式と同様の器体に脚部を貼付せず口縁部に一对の取手を付す、外耳・内耳折衷形の土師質土器鍋²³の出現・普遍化、④桶井型土器擂鉢B形式の出現、⑤短い三脚を付す火鉢形の土師質土器深鉢の出現、⑥白磁皿E類（森田勉分類）、青磁碗D・E類（上田分類）を中心とする輸入陶磁の一定量存在、⑦備前産杯・擂鉢・壺・甕の一定量存在に加え、瀬戸美濃産丸皿・天目茶碗の少量存在、である。

様相の細分は、今後の課題とせざるを得ない。上記①の系譜関係の特定と型式組列の復元が重

要な手がかりになることが予想されるが、法量・形態とともに指標となるような差異を見出すことは現状では難しい。これに②・③の形態変化、および⑥・⑦における生産地の変動などが加味されることで、2～3区分できよう。なお、最末期に高松築城が開始しているが、城内・城下で当該期に該当する可能性をもつまとった資料は、今のところ片原町遺跡SD01出土例²⁴を挙げ得る程度である。

【X I 期（17世紀初頭～17世紀後半）】

①土師質土器皿における、新たな主要4系譜（高松城佐藤分類A II・III・V・X形式）の出現・普遍化、②亀山系土器鍋からの系譜が追える御廐産土師質土器焙烙の出現、③口縁部内湾の土師質土器擂鉢、外耳・内耳の折衷形の土師質土器把手付鍋の主体的存在、④供膳器種における肥前系陶器（唐津）・磁器（伊万里）の出現と急速な普遍化、⑤供膳器種における瀬戸美濃系陶器（天目茶碗・丸皿・折縁皿）のX期からの拡大的継続と、志野・織部の出現、⑥備前産陶器擂鉢・甕・茶道具の主体的存在、⑦景德鎮窯系・漳州窯系の青花椀・皿の一定量存在、などが特徴である。バリエーション・数量とともに、讃岐以外の地域からもたらされた「搬入品」を抜きにして、当該期の様相を語ることはもはやできない状況であり、この点にX期からの質的な飛躍が指摘できる。その一方で、上記③はX期からの延長で捉えられる要素であり、鉄鍋の存在を考慮してもなお、主体的な③の代替品の存在を想定し難いことから、煮炊器種における中世的要素の継続を認める必要がある。

古相（高松城様相1）・中相（高松城様相2）・新相（高松城様相3）・最新相（高松城様相4）と4区分できる。細分の指標は、上記①～⑥における各形式の存否もしくは型式組列で行うことが可能である。

【X II 期（18世紀前葉～19世紀中葉）】

①X I 期に見られた土師質土器皿主要4系譜の途絶（うち皿A II・III形式はX I 期最新相、皿A V・X形式はX II 期古相をもって消滅）と新たな主要3系譜の出現、それに関連すると見られる備前産陶器灯明皿2系譜の出現（遅れて瀬戸美濃系、京・信楽系も出現）、②大坂からの搬入の可能性をもつ、精製品としての土師質皿AX I形式（所謂「黒斑土師器」、大坂城下町での用例）の少量存在、③供膳器種における京・信楽系陶器の出現・普遍化と、やや遅れるが瀬戸美濃系陶器の普及、④在地産陶器としての古理兵衛、源内、屋島、富田等の少量存在と、新相以降の軟質陶器行平・土瓶の普遍化、⑤備前産擂鉢模倣に始まる堺擂鉢の急速な普遍化、⑥土師質土器焙烙における御廐産と岡本産の急速な普遍化と、御廐産土師質土器羽釜・七輪・焜炉等の出現・普遍化、⑦土師質土器甕・井戸側等の大型生活道具の出現と普遍化、などが特徴である。在地産土器・陶器の器種限定的な独占と肥前、京・信楽、瀬戸美濃の供膳器種中心の普遍化が明確化し、その

構成や形態からも近世的な様相の完成期と評価できる。

古相（高松城様相5）・中相（高松城様相6）・新相（高松城様相7）・最新相（高松城様相8）と4区分される。細分の指標は、上記①・③～⑦における各形式の存否もしくは型式組列で行うことが可能である。

【X III期（19世紀後葉）】

通常の発掘調査では「搅乱」として除去されることがほとんどであるため、混在の少ない単純な資料群を抽出することが困難である。①土師質土器皿の消滅、②御廐産焙烙における外型成形の採用と瓦質焼成への転換（焙烙A II形式）、③肥前系磁器を中心とする型紙刷りによる椀皿の出現・普及、④理兵衛、屋島等に見られる煎茶器・酒器などへの展開、などを特徴とすることが予想される。²⁷

【古代／中世／近世的様相？】

以上がI～X III期の概要であるが、これらのいずれが古代土器／中世土器／近世土器（陶磁器含む）と呼称するに相応しいと捉えるか、意外に難しいことに気付く。在地土器に限定した様相把握では、A群（I～III期：7世紀中葉～9世紀中葉）、B群（IV～VII期：9世紀後葉～13世紀中葉）、C群（VIII～X I期：13世紀後葉～17世紀後半）、D群（X II～X III期：18世紀前葉～19世紀後葉）の4区分が妥当であろう。搬入品の量的普遍性を前提にした様相把握では、 α 期（I～III期：7世紀中葉～9世紀中葉）、 β 期（IV・V期：9世紀後葉～11世紀前葉）、 γ 期（VI～VIII期：11世紀中葉～14世紀前葉）、 δ 期（IX～X期：14世紀中葉～16世紀末葉）、 ε 期（X I～X III期：17世紀初頭～19世紀後葉）と見ておきたい。

区分された群の境界が一致するのは9世紀中葉／後葉のみであるが、これは搬入品が一定量以上を占めるようになった年代を示している。したがって、仮に古代／中世／近世という時代区分が土器様相においても関連性をもって現れてくるとする立場に立つのであれば、古代／中世、中世／近世の区分、あるいはその細分（古代前期／後期等）を行うにあたり、搬入品の内容と組成を看過した評価はできないと考える。²⁹こうした区分を行うこと自体が妥当な議論かどうかも含め、本稿（5）で後述することにしたい。

2. IV期の様相

2-1. 抽出資料と問題点

【IV期古相】

多肥北原西遺跡 SD0501 出土土器 (図版1) 東西に長く続く道路側溝と推測される遺構。比較的出土量の多い9区部分を抽出した。須恵器杯・皿はまとまった内容をもち、Ⅲ期以前に普遍的であった蓋物がほとんど存在しない(報告分では皆無)。次回以後の検討対象であるが須恵器壺・甕、土師器甕も形態的にはまとまっている。搬入品としては、底部回転糸切りの須恵器平高台椀(畿内もしくは播磨産か)、京都産緑釉陶器椀がある。後者は、小口径で口縁端部が緩く外反し、糸切り痕を残した平高台を伴っており、平安京Ⅱ期古～中(840～900年頃)、高橋照彦氏編年の畿内Ⅱ期(9世紀中葉～後半前半)に位置付けられる。前者も播磨諸窯では同時期に存在しており、年代的な矛盾はない。

すべっと1号窯跡窯体内出土土器 1号窯跡では、窯体内(香川県教委1968)と灰原(片桐節子1994)とで須恵器の様相がかなり異なる。一言で表現すると、蓋物の存在(灰原)と無蓋(窯体内)という差異であり、明瞭な年代差として捉えられる。灰原が窯体よりもかなり下方に存在しており、出土須恵器には明らかに12世紀代まで下る鉢・甕が一定量存在している(片桐節子1994報告書55・57～69・80・81)ことから、灰原の一部は別の窯に由来する可能性も否定はできない。このような問題点が残るが、窯体内出土須恵器は多肥北原西遺跡 SD0501 出土土器に近似した特徴をもっており、ほぼ同時期の所産と考えられよう。なお、灰原出土須恵器で12世紀代(VI期新相)のもの以外は、Ⅲ期新相に位置付けることが可能な資料である。

【IV期中相】

郡家一里屋遺跡 I 区 SD12 出土土器(図版2・3) 平野部の微高地に制約された溝群から屈曲・分岐し、条里型地割の方向に従い流下する素掘り溝。分岐部分でSD13と重複関係にあり、堆積層の検討からSD12が先行することが報告されている。「屈曲点から北では、東側の肩がなだらかであるのに対し西側の肩はかなりえぐれており、屈曲する際に西肩をえぐったものと考えられる。散乱している石と考え併せ水量はかなりあったと考えられる」。また、「検出長が短いにも関わらず大量の土器が出土した」。

出土した須恵器杯や土師質土器皿には、明らかに古い時期の所産のものがかなり認められる(報告書88・100・104・112・124・165～173・175～182・187～199)ため、土器群の廃棄あるいは溝内集積が単一時期に行われたのではないことがうかがえる。上記報告書の記述を踏まえるならば、出土地点直近での廃棄を反映するというよりは、上流側での複数回の廃棄と、その再集積・

埋没という状況を考えた方がよいであろう。このため、出土土器全体の中より新しい特徴をもつ一群を抽出・提示することになるが、こうした一群が量的には最も多いとみられること、またこれよりもさらに新しい土器（例えば11～12世紀の所産）が存在しないことから、下限については比較的明瞭に線引きできるものと思われる。なお、須恵器杯・皿には墨書き土器がある（報告書131・157・159）。搬入品としては、平高台（圓線高台状）を伴い全面施釉する小口径の綠釉陶器碗（231）があり、高橋編年のⅡ期（9世紀後半）に位置付けられる。

【Ⅳ期新相】

郡家一里屋遺跡 I 区 SD13 出土土器（図版4・5） 上記SD12の屈曲部を切り込み流下する素掘り溝。検出部南半部と思われる3箇所の埋土断面図（報告書第95図）によると、下層（Ⅲ層、出土遺物の記述箇所では第3層）と中層（Ⅱ層、第2層）との間には再掘削ないし浸食による再開削と思われる堆積の断絶が認められ、Ⅱ層堆積後の浅く幅広い窪地状の流路に上層が堆積している。一方、SD12との切り合い箇所の断面図（報告書第74図E・F断面）を見ると、礫を多量に含むSD13Ⅱ層相当層の下位に先行する流路の落ち込みが認められ、その堆積層（同断面4・12層）はSD12の埋土と判断されている。分岐・屈曲部以南（以東）のSD12の流路の位置が明確でないことを併せ考えると、SD12はSD13Ⅲ層の下流もしくは分岐・平行した流路である可能性が指摘できる。いずれにしても、SD13の中でSD12と明確な前後関係をもった堆積と判断できるのはⅡ層（第2層）である。

第2層出土土器には、須恵器杯や土師質土器杯のようにSD12との様相を指摘できるものがある一方、須恵器皿のように明確な区分が困難で、法量（口径）がSD12よりも大振りな個体が存在する。これは、十瓶山窯での所見からすると、より古い要素といわざるを得ないが、これらはⅢ期に遡る一群（報告書368～400・403・404・405・409・413・414・416～425・431・432）と同様に捉えるべきなのかもしれない。これらが混在する理由は、SD12と同様な状況が考えられよう。搬入品としては、須恵器平高台碗（360・361）、綠釉陶器碗・皿（441～449）、灰釉陶器皿（450）がある。須恵器平高台碗のうち、360は底部回転ヘラ切り、361は回転糸切りであり、ともに畿内もしくは播磨の製品と思われる。綠釉陶器は、高台の形状や施釉範囲から高橋編年Ⅱ～Ⅲ期（9世紀後半～10世紀初頭）と考えられる。灰釉陶器は黒窓90号窯期（K-90、平安京Ⅱ期古～中（840～900年頃））である。綠釉・灰釉ともにSD12と大差ない年代観であるが、SD12と同時併存の可能性を指摘したSD13Ⅲ層（第3層）でも第2層と同様の綠釉・灰釉が認められることから、これら国産陶器の一定期間の保有・使用、もしくは下層の攪乱による再堆積などの状況を想定した方がよいのかもしれない。いずれにしても、国産陶器の内容よりも在地土器の形式組列が設定できるか否かが、当面する課題である。

川津東山田遺跡 I 区 SD3109 出土土器（図版6） 鍛冶関係遺構の周囲を囲む素掘り溝で、³³

SD3209・SD3210 a・b、SD3106とともに約15m四方の区画（内側に鍛冶炉3基・竪穴建物1棟等を配する）を構成する。幅広で浅い溝であり、2状程度に細分されるが、前後関係をもつ重複か同時併存で埋没の時期差が存在するのかは不明である。埋土中からは土器とともに「鞴羽口、鉄滓、焼けた石が出土しており」、「炉から排出された廃棄物を搔き出す場所とも考えられるが、土器も数多く出土しており、他の廃棄物も集めた場所だったかもしれない」とされる。遺物の詳細な出土状況や埋没過程は明らかでないが、飯野山北麓の緩斜面であり、埋土が「粗砂混粘質土」を主体としていることから、一定期間オープンのまま山側から流れてきた土砂によって自然埋没したことが考えられる。出土土器は、須恵器杯、土師質土器杯・椀、土師器甕・羽釜などがそれぞれ形態的にまとまった内容をもっている。搬入品としては、京都産と見られる硬質の緑釉陶器椀（403・404）があり、高橋照彦氏編年の畿内Ⅲ期（9世紀後葉～10世紀初頭）にあたると思われる。

下川津遺跡 SE Ⅲ 04 出土土器（図版8・9） 平面円形の掘り方内の四隅に杭を打ち込み、その間に幅5～10cmの板材を縦に並べて井戸枠としており、その下の湧水部には曲物が2段重ねられていた。土層断面図が示されておらず、井戸の廃絶状況や裏込め土の状況は明らかでないが、「廃絶後の供献土器等は認められず、また井戸が包含層の上面から掘り込まれているため、裏込めや埋土中に土器片が多数混入していた」とされており、一括廃棄を端的に示すような遺物出土状況でなかつたことがうかがえる。出土土器は、須恵器杯、土師質土器杯・椀、土師器甕・羽釜、黒色土器椀などがそれぞれ形態的にまとまっているように見受けられるが、土師質土器小皿（報告書450-3）は中世前期の所産で、須恵器杯（451-9）は古代Ⅰ期（Ⅰ・Ⅱ期）のものである。後者は古い遺物の混在として理解できるが、前者は遺物取り上げ時の紛れ込みもしくは当遺構埋没後に堆積した別時期の層位に含まれていた可能性があろう。なお、「平安時代の洪水砂層堆積時期に突発的に[第1低地帯との、筆者註]合流部に形成された浅い凹地」とされる下川津遺跡第2低地帯流路2出土土器（図版7）も、ほぼ同じ特徴をもつ資料である。³⁴

2-3. 須恵器

【杯B形式】

回転ヘラ切りによる平坦な底部をもつ、平底の無蓋杯である。十瓶山窯産製品を主体とするが、同形態の資料は讃岐西部の三野・刈田2郡の生産地においても確認できる。³⁵Ⅱ期から連続的に捉えられる浅手のBⅢ・Ⅳ・Ⅳ'形式、深手のV・V'形式がある。前者は口径/器高により、より深手なBⅢ形式とより浅手のBⅣ形式、その中間のBⅣ'形式に細分できる。後者は体部上半から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるBⅤ形式、直線的に外傾して立ち上がるBⅤ'形式に細分される。これら細分した一群は、Ⅳ期新相まで見えるため、同一形式内の微細なバリエーション

ン（つまり単系列における振れ幅）としてよりも、独立した形式として捉える方が変遷過程を理解しやすい。

杯B III・IV・IV' 形式の変化は、①口縁・体部が次第に外傾度を増して外開きのプロポーションになること、②底体部の境が直線的に屈曲するものから次第に底部が突出気味になること、の2点によく表れている。

①について補説する。古相では、3形式ともに底径/口径の比率がほぼ同じであるため、深手のものほど口縁・体部が直立方向に近く、浅手のものほど外傾しているように見える。外開き傾向の強い順にB IV→B IV'→B IIIとなる。しかし中相・新相では、深手なものほど底径が小振りになる（底径/口径が小さな数値になる）傾向が顕在化するため、中相・新相では3形式の外傾度はほぼ同じになる。こうした差異をベースとしつつ、全体としては外傾度が強くなるということが指摘できる。②の要因としては、平高台椀からの形態的な影響も無視できないであろうが、円盤状の分厚い底部をもたないことが平高台椀とは異なるところである。杯B III・IV・IV' は中相から新相にかけて、底部も含めた器壁がかなり薄くなり、口クロ目がよく通る個体がしばしば見られるが、こうした薄手の器体においても強度が求められる底体部境（腰部）を厚くするための手法として、回転ヘラ切りの位置をやや下方に下げた結果、生じた形態なのではなかろうか。口径は、古相が11～13cm台、中相が12～13cm台、新相が12～14cm台。古相に小振りなもの（11cm台）、新相に大振りなもの（14cm台）がやや目立つ以外は、法量の著しい差異は認められない。ただし新相では、B III形式が相対的に大きな口径分布を示す。

これら以外に新相には、内湾する体部と外反する口縁部、突出気味の底部をもつB IV" が少数認められる。

杯B V・V' 形式の変化は、体部の外傾度がより強くなる（外開きになる）傾向に表れている。口径は、杯B III・IV・IV' よりも大振りであり、古相・中相で13～14cm台、新相で14～16cm前後である。

【杯C形式】

高台付の杯であるが、蓋を伴わない。III期までの杯C IIに連なると思われる杯C II' 形式が少數認められる程度である。杯C II形式よりもかなり深手で杯B V形式と共通した形態の器体をもち、底部外縁に低い扁平な輪高台が貼り付けられる。中相まで存在を確認でき、体部の外傾度がより強くなる傾向の変化をたどるようである。

【椀A I形式】

内湾気味に外傾する口縁・体部をもち、回転ヘラ切りによる底部外縁に輪高台が貼り付けられる。端部を水平方向へ挽き出して内傾する面を作ることや、細身で外側に踏ん張る高台をも

つことなどに、杯C II' 形式とは明確に異なる特徴が見出せる。おそらく緑釉陶器や灰釉陶器などの形態的影響下で出現したと思われ、生産遺跡（すべっと2号窯跡）・消費遺跡（郡家一里屋遺跡I区SD12）ともに中相のみに見られ、かなり限定された時期に存在する形式である。

【椀B形式】

強く内湾して立ち上がる口縁・体部をもち、ヘラ切りによる円盤状の平高台をもつ。在地製品（十瓶山窯産）としての明確な事例はすべっと5号窯跡灰原出土例に見出せるだけであり、消費遺跡では今のところ未見である。椀A I 形式と同様、中相のみに見られる限定的な存在である。個体数が少ないため、既に述べたような搬入品（多肥北原西遺跡SD0501の239、郡家一里屋遺跡SD13の361・360）との形態的差異は必ずしも明確でない。別々の形式（例えばB I・II形式）としておくのか否か、検討を要する。

【皿A I 形式】

II期から継続する形式であり、III期を通じてたどってきた漸移的な口径の縮小化と底体部境（腰部）の屈折明確化、さらに口縁・体部の薄手化などの傾向の延長に位置付けられる。古相では口縁部の比較的長く直立気味な一群（多肥北原西遺跡報告書225・226・230・232・237・218・222）と、短く外傾する口縁部をもつ一群の2者があるが、中相では後者のみでより薄手になり、新相に続く。口径は古相で11cm台後半～15cm、中相で12cm台後半～14cm台前半、新相（かめ焼谷1号窯跡）で10～12cm台となる。消費遺跡での新相の様相は、2-1.【IV期新相】で述べたようにIII期に遡るものを含むかもしれません、口径にばらつきがある。いずれにしても、消費遺跡では新相の皿A I 形式は急速に減少することがうかがえる。後続するIV期では、生産・消費遺跡とともにこの形式を含めた須恵器皿そのものを見出すことができない。

2-4. 土師質土器

【杯A形式】

回転ヘラ切りによる平坦な底部をもつ平底杯であり、須恵器杯B形式と相似形の一群である。須恵器と相似形の土師質土器杯は、II・III期にも散見されるが量的には少数派にとどまっており、III期においても古相では僅少で中相・新相にかけて急増・顕在化していく。口径/器高により、A I'（須恵器杯B IIIと相似）・A I（須恵器杯B IV' と相似）・A II（須恵器杯B IVと相似）・A III（須恵器杯B IV" と相似）の4形式に細分できる。須恵器杯B V・V' 形式と相似形になる形態は、認められない。古相にはA I 形式が極少数、中相にはA I・II形式が一定量、新相にはA I・I'・III形式が相似形の須恵器杯と拮抗、あるいはやや凌ぐ存在になる。形態変化の方向

は須恵器杯B形式と同じと思われるが、古相での存在が僅少なために細分様式内での底径/口径の比率差のあり方の変化については不分明なところがある。また最もバリエーションが豊富になる新相で見ると、AⅢ形式が比較的目立つところが、これと相似形の須恵器杯BⅣ”形式が僅少であるのとやや異なる点であり、バリエーションの量比までが須恵器と相似ということでもないようである。

【杯C I形式】

V期に主体をなすC形式に連なるような形態が、新相に極少数認められる。杯A I形式に比して底体部の境が明瞭に屈曲せずに緩くカーブし、底部中央が突出気味になる。C I形式とするのか、あるいはA I形式のバリエーションとして捉えC形式をV期に限定するのか、検討を要する。

【杯B形式】

直線的に外傾する口縁・体部をもち、底部外縁に輪高台を貼り付ける。B形式とB'形式の2つに細分できる。B形式は、杯A I形式の底部外縁に高台が貼り付けられたような形態であるが、口径の分布域は1cm以上大振りであり重複しない。体部が直線的であること、高台が細身で長いことなどが、椀A IV形式と異なる特徴であるが、中間的な形態の個体も存在しており、区分がやや曖昧なところもある。B'形式は、B形式と底径/口径比を同じくした深手の器体をもつ。B形式は中相・新相で、B'形式は新相で認められる。

【台付杯】

長く延びて踏ん張る脚台をもつもので、器体は杯A I形式と相似形であるが、口径は16cm台と大振りである。脚台の貼り付け位置は、底体部境よりやや内側。新相に極少量認められる。V期で多く見られるようになる形式であり、脚台の形態変化が問題となるが、いずれも脚台を欠損しており明らかにできない。

【椀A IV形式】

完形品に恵まれないが、高台や体部下半の形状は黒色土器A類椀A IV形式と相似形である。中相・新相に少量存在するが、形態変化の詳細については明らかにできない。

【椀B形式】

円盤状の平高台（ヘラ切り）をもつもので、B I・B IIの2形式に細分できる。B I形式は、直線的に外傾する口縁・体部をもつ。B II形式は、内湾して立ち上がる体部と、直線的もしくは外反気味に延びる口縁部をもつ。前者は平高台から直立気味に立ち上がった後に外傾・内湾する

体部へと延びており、見込みが明瞭に窪む形態的特徴をもつ。後者は底部から比較的連続して立ち上がる体部下半をもち、見込みはさほど顕著には窪まない。古・中相では未見で、新相に出現し急速に普遍化する。

【皿A形式】

須恵器皿A I 形式に近似した形態をもつもので、中・新相に存在する。中相では口縁端部に内傾する凹面を伴っており、同時期の須恵器皿には見られない土師器的な特徴を残している。新相では須恵器皿と相似形になる。口径は中相で12～14cm台、新相で11～12cm台であり、須恵器とほぼ同じ法量をもつ。

2－5. 黒色土器

【A類椀A形式】

A III・A IVの2形式に細分できる。A III形式は、外開きに内湾する口縁・体部による浅手の器体と、底径/口径比が比較的大きい輪高台を伴う。古相では体部下半の湾曲が弱く、腰の張りが少ない形態。中相では古相と同様の形態(郡家一里屋 I 区SD12-223)と、やや深手になるもの(224・229)がある。新相ではさらに深手になる。A IV形式は、内湾気味に外傾する深手の器体をもつもので、A III形式よりも径が小振りで断面逆台形の扁平な輪高台を伴う。中・新相に存在し、高台径が縮小化し、口縁・体部の外傾度が増す方向で変化するものと思われる。A III・IV形式とともに、内面を中心に密度の高い丁寧なヘラ磨きが施されるが、同時期の畿内での事例のような渦巻や輪花状の暗文は認められない。

A III・IV形式とも、IV期新相をもって終わり、V期には継続しないようである。IV期の指標をなす形式といえよう。

3. V期の様相

3－1. 抽出資料と問題点

【V期古相】

讃岐国分寺跡 SK25・26 出土土器 (図版 11) 僧房跡北側雨落ち溝の外側 (北側) に群在する土坑群のうちの2基で、方形 (SK25) と不定形な橢円形 (SK26) を呈する平面形をもつ。詳細についてはまだ報告されていないが、概報の写真図版 (PL. 4- (7)) を見る限りでは、残存深度

はかなり浅いようである。土器はかなりまとまって出土したようであり、SK25では「多量の土師器、少数の黒色土器および須恵器から成り、完形品も多い」とされ、SK26では「整理箱1箱分の土器が出土した。大部分が土師器で、少数の黒色土器・須恵器を含む」とされる。なお、同資料については現在、高松市埋蔵文化財センターで整理中であり、同センターの御厚意で実見する機会を得た。搬入品としては、①黒色土器椀（概報18-9、SK26出土）、②須恵器平高台椀（18-20、SK25出土）、③篠窯産須恵器捏鉢がある。①は楠葉型黒色土器B類椀であり、森隆氏編年のI段階（10世紀中頃）に相当する。I段階の岡山南遺跡（四条畷市）井戸出土例は、平安京右京二条二坊三町SX1（平安京Ⅲ期古：930～960年頃）併行の京都産土師器皿と共に伴しているとされる。³⁷ ②は底部回転ヘラ切りであり、畿内（西摂）もしくは播磨からの搬入品と思われる。③は平安京Ⅲ期古～中（930～980年頃）に位置付けられる。

【V期中相】

前田東・中村遺跡E区 SD19出土土器（図版12～15）³⁸

ほぼ同時期と見られる建物群に伴う区画溝とされる。土器群は3層に分けられる堆積層の下層（黒褐色粘土層）の上部から多量に出土している。また、平面的には検出部の中央北半部に集中するようであり、「南半部では遺物は少なかった」。出土状況の写真（報告書図版64下段）や土層断面図（報告書第452図B-B'断面）を見る限り、遺物は溝底や西肩部直上で出土したものと、2・3層の境で出土したものがあり、前者が集中部北側、後者が集中部南側に多く見られる傾向を指摘できる。溝の埋没過程で複数回投棄されたものの集積として捉えられるのではないか。出土土器は、取り上げ時の混在と推測される中世Ⅱ期の須恵器椀（報告書394）、より先行する時期（IV期中相～新相）と見られる十瓶山窯産須恵器杯（395～397、いずれも細片）を除き、ほぼまとった内容をもつと考えられる。ただし多量に出土した土師質土器杯は、形式内での個体差がかなり認められる。これは、例えば中世Ⅱ期の土師質土器杯に比して、際立った特徴といえる。搬入品としては、楠葉型黒色土器B類椀（383）、近江型緑釉陶器椀（400・401）がある。前者は森隆氏編年のⅢ段階（11世紀初頭～前半頃）に、後者は高橋照彦氏編年の近江Ⅱ期（10世紀後半）に比定できる。

【V期新相】

前田東・中村遺跡E区 SK04出土土器（図版16）隣接する掘立柱建物（S B 12）に伴う地鎮土坑と推測されている。直径0.76m、深さ0.42mの素掘り土坑であり、底面中央に十瓶山窯産須恵器広口瓶（報告書690）を据え、埋め戻し途上で土師質土器杯を2枚一組にしたものと長頸壺（689）1点を広口瓶の周囲6方向に置き、最後に広口瓶の口縁を板石と黒色土器托上椀底部で、長頸壺口縁部を托上椀体部片で蓋をして、埋め戻されている。土師質土器杯は、SD19よ

りも形態的なまとまりがあるように見受けられるが、それでも中世Ⅱ期のそれよりも個体差が大きい。また689については、その編年的位置付けが問題となろう。

3-3. 須恵器

【杯B形式】

讃岐国分寺跡SK25・26出土資料と同様の特徴をもつ十瓶山・深池窯跡出土資料も参考に概観する。Ⅳ期から引き続くBⅢ・Ⅳ'・Ⅳ"・Ⅴの4形式が見られる。古相においては、BⅣ'はⅣ期での変遷の延長上にあるといえ、口縁・体部の外傾度がさらに増している。これに対しBⅢ形式は、Ⅳ期新相よりもやや浅手になるものの、口縁・体部の外傾度はさほど変化しない。またBⅤ形式も浅手化し、体部が内湾するようになる。BⅣ"形式は、Ⅳ期新相よりも口縁・体部が直立気味で、底部が厚くなり平高台状を呈する。中相では、須恵器杯の存在は極めて稀になり、口径が縮少し浅手になったBⅣ'形式が確認できるに過ぎない。³⁹

VI期古相での須恵器杯の形態・技法・バリエーションは、上記4形式の延長上にあるとは考えられない。やはり須恵器杯は、V期中相での僅少化（新相では資料数が少ないため途絶したかどうかは不明）を経て、VI期に新たな形で再登場すると見た方がよく、VI期古相の杯にヘラ磨きが多用されることから、黒色土器・土師質土器を含めた生産集団の再編・混淆が行われたと推測される。

3-4. 土師質土器

【杯A形式】

AⅠ・Ⅰ'・Ⅰ"・Ⅲの4形式が認められる。Ⅳ期新相に比して、全体に器壁が厚くなり、特に体部下半～底部外縁でこの傾向が著しく表れる。AⅠ形式は、古相ではⅣ期新相よりも口縁・体部が直立気味になり、中相では若干浅手になる。AⅠ'形式は古相にのみ認められ、AⅠ形式と同様に口縁・体部が直立気味になる。AⅢ形式は古相のみに認められるが、やはり口縁・体部が直立気味になり、底部が分厚くなること、また底体部境外面に強く回転ナデが施されることで、須恵器杯BⅣ"形式と同様、平高台状を呈するようになる。AⅠ"形式は中相に認められ、AⅠ形式よりも内湾する口縁・体部をもつため、底体部境が緩やかにカーブするように見える。

【杯C形式】

杯B形式よりも小口径・浅手の、皿に近い形態をもつ一群である。相対的にやや深手のCⅠ形式と、かなり浅手のⅡ・Ⅱ'形式が認められる。既述のようにCⅠ形式がⅣ期新相に出現してい

た可能性があるが、C形式が量的に多数を占めるようになるのはV期古相からであり、V期の指標をなす形式といえる。

C I形式は、直線的に外傾する口縁・体部をもち、底部中央が弱く突出して丸底状を呈する。古相から新相にかけて、口径の分布域にはほとんど変化が見られないが、形態的に底部厚が増し(古相→中相)、より深手で口縁・体部が直立気味になる(中相→新相)⁴⁰という変化をたどる。ところで、前田東・中村遺跡E区SD19出土例(中相)・同SK04出土例(新相)の中で器面の遺存状態が良好なものを見ると、見込み中央に回転ナデに後出する強いナデの痕跡が認められる。ヘラ切り後に器体の見込みを強くナデるように押し、底部を突出させる工程が推測され、森田勉氏が大宰府出土土器で指摘したのと同様の状況が指摘できる。ただし、大宰府の事例は口径15cm前後の大型品に見られる点がC I形式とは異なっており、またC I形式での「底部押し出し」はかなり粗雑に行われ、同一個体でも部位によって仕上がりの形状が異なることなど、大宰府での事例と同一の製作技法として評価し得るかどうか、疑問である。なお、「底部押し出し」がC I形式の設定にあたっての必須要件かどうかも、検討する必要がある。

杯C II形式は、C I形式よりも浅手で皿形に近いものである。底部は突出気味のものも少量あるが、大多数は回転ヘラ切りによる平底である。口縁・体部が外傾気味に比較的長く延びるもの主体(古相)から、より直立気味のもの主体(中相→新相)へと変化する。前田東・中村遺跡E区SD19出土例では、①平坦な底部から外反気味に延びる口縁部をもち、底部と体部との境は明瞭な屈曲をなし、底部外縁に明瞭なアクセントがあるもの(仮称A群)、②底部から外傾気味に立ち上がる体部・口縁部をもち、底径指数(口径/底部径)がA群よりも小さく、直口もしくは外反する口縁と底部との間に丸い腰部をなすもの(仮称B群)、③底部から内湾もしくは真っ直ぐ延びる体部・口縁部をもち、底部指数がA群と同様で口縁部の外傾度はB群よりも直立気味、丸い腰部をもつもの(仮称C群)、の3つに細分できるようにも見受けられる。しかし、それぞれの群の変化は極めて漸移的であり、上記①～③の特徴を形式細別の指標とするのは難しいと考える。むしろ従来よりも個体差が顕在化したような状況が想定できるのではないだろうか。

なお、古相で平高台的に突出する底部をもつものをC II'形式としたが、その存在は極少数であり、上記したようなC II形式の変異幅の中で捉えるのが妥当かもしれない。

【台付杯】

IV期新相から引き続き見られ、かなり普遍的な存在である。脚台の貼り付け位置は、底部外縁端よりも明瞭に離れて内側にあるものと、やや内側にあり接合時の補充粘土によって底部外縁と脚基部の境が連続的になるものの2者併存(古相)、やや内側と外縁端の2者併存(中相)と変化する。脚端部の形状は、明瞭な面をもつものと、やや丸味をもった面をもつものの併存(古相)、やや丸味をもった面をもつものと、丸く収まり面をもたないものとの併存(中相)と変化する。

新相の状況が不明であるが、VI・VII期にも継続していく。

【椀B形式】

中相では一定量存在を確認できるため、現在のところ未見である古相でも存在した可能性がある。B I・IIの2形式存在する。B I形式は、IV期新相よりも体部下端内面の立ち上がりが短くやや不明瞭になり、同部の器壁が厚くなっている。おそらくそれと関連するが、体部下端外面に強い回転ナデが施されて平高台との境が明確化される。この部分が強いアクセントとなるため体部が内湾するように見えるが、体部上半から口縁部にかけては直線的に外傾する。B II形式は、IV期新相よりも口縁・体部長が短く、浅手で底径指数が大きくなる。また体部の内湾も弱くなる。椀B形式は、主にB I形式と思われるものがVI・VII期にも一定量存在する。

3-5. 黒色土器

【A類椀A II形式】

半球形の深い椀形の器体をもち、底部に長く延びる断面方形ないし逆台形の輪高台が貼付される。古相では、やや浅手のものと深手のものが存在するようであるが、資料数が少なく、有意な区分とし得るかどうかは検討課題である。見込みには平行線状磨き、体部内面には5ないし6方向の分割磨きが施されるが、外面には分割・回転問わずヘラ磨きが施されない。外面のナデ調整は回転ナデであり、土師質土器と同じく回転台上での成形が推測される。中相では、深手と浅手に一定の幅があるが、中間的な個体もあるため、明確な区分は難しい。しかし、傾向としては深手のものは少ないようである。また、外面に回転ヘラ磨き調整と分割磨きが併用される。内面の磨きは、古相と同様である。外面の回転ヘラ磨きは、体部下半から底部にかけて施される回転ヘラ削りによって生じた粗面と稜を処理するための手法と考えられる。前田東・中村遺跡E区SD19出土例（中相）の浅手の一群には、砂粒の含有が少なく白色に発色するもの（精製）と、砂粒を多く含み褐色に発色するもの（粗製）の2者があり、別生産地の所産である可能性がある。新相では資料数が乏しく未見であるが、VII期古相には同一の型式組列で捉えられるものがおり（西村型土器椀）、外面の分割磨きの省略、深手の増加、などの変化が指摘できる。

【A類椀A V形式】

浅手の器体と細身で長く直立する輪高台をもつ。中相に見られる。A II形式と比較して、①高台が細身で径が大振り、②外面に回転ヘラ磨きを施さない、③器体の作巧が粗雑で器面の起伏が見られる、④口縁端部内面に内傾する明瞭な平坦面をもつ、などの相違点を指摘できる。模倣対象とした焼物が、A II形式とは異なる可能性もある。時期幅のある資料であるが、川津東山田⁴¹

遺跡 I 区SR01 (D) 東側流路出土土器の中に A V 形式を見出すことができる。

【B 類椀 A VI 形式】

A 類椀 A II 形式と同様の形態・技法をもつもので、やはり深手と浅手の幅がある。中相に見られ、新相は未見だが VI 期古相には見られるため、連続した型式組列を構築できる可能性がある。出現期については、中相とするか古相まで遡らせるか、検討課題となる。いずれにしても、A 類椀に比してその存在は少数派にとどまるようである。

【B 類椀 A VII 形式】

細身で長い高台をもち、高台外周に鰯状に突帯を巡らせる「托上椀」である。他の黒色土器椀よりも大振りであり、相対的に高台径は小さく、高台長が長い。内面には分割磨き、外面には回転ヘラ磨きが底部を除くほぼ全面に施される。回転ヘラ磨きの存在から、在地産の可能性が強いと考えられる。V 期中相・新相に見られるが、帰属細別期が明らかでない（時期幅があつたり出土資料が僅かであるなどの資料上の制約により）個体を含めると、前後に及ぶ可能性があるため、型式学的な変遷過程の見通しを示す。

①前田東・中村遺跡 H①区SD03出土例。⁴² 古代（8世紀代中心）・中世（12～13世紀）・近世の建物や溝が集中する地点で、SD03からは12世紀代の和泉型瓦器や平瓦片が伴出、またSD03と重複・後出するSD09からはIV期中相～新相の黒色土器 A 類椀 A IV 形式が出土。遺物の共伴関係から帰属細別期を押さえることはできない。還元状態に近い、かなり良好な焼成の B 類椀 A VII 形式であり、ハの字形に長く延びる高台の端部には水平方向の広い平坦面が形成される。高台基部の屈曲は明瞭で、その外側の突帯は先端下面が広く回転ナデされて、やや上向きの水平方向に収まる。体部には回転ヘラ磨きが隙間なく密に施されているようである。全体にシャープな作巧である。

②前田東・中村遺跡 E 区SD19出土例（V 期中相）。①よりも高台は短くなるがハの字形の踏ん張りは踏襲され、基部が明瞭に体部下端から屈折するものと、やや甘く緩やかに曲がるものがある。しかしいずれも、高台端部にやや膨らんだ明瞭な面が形成される。また突帯先端下面は回転ナデによる明瞭な平坦面があり、上向きに収まる。体部の回転ヘラ磨きは密に施される。

③前田東・中村遺跡 E 区SK04出土例（V 期新相）。②よりも高台が短くなり、基部は甘く緩やかに曲がる。高台端部が丸く収まるようになる。突帯下面のナデは弱くなり、端部は斜め下方を向く。口縁・体部の回転ヘラ磨きは、やや隙間が空く。

④川津東山田 I 区SR01 (D) 東側流路出土例。III 期～VI 期の土器が混在して出土しており、帰属細別期を絞り込めない。「土師器」として報告されているが、内面の過半と体部外面に黒色処理の痕跡と見られる黒化部分が認められることから、二次的な被熱で炭素吸着が失われた黒色

土器B類碗と考えることができる。③よりも高台はさらに短く低く、基部は接合痕を残しており十分なナデ調整がなされない。突帯はかなり短く突き出す。体部外面のヘラ磨きは回転磨きでなく、分割磨き。

以上から、①→②→③という変遷が想定できる。④についてはこれらに後続する可能性があるが、外面に回転ヘラ磨きが採用されることをどのように解釈するか、という問題が残る。①～③は同一遺跡であり、④は地域的に大きく隔たっていることも気になる点である。例えば今回の検討対象地域（讃岐中央部）からは外れるが、西讃とその隣接地域でV期古相～中相と併行すると思われる様相を構成する黒色土器碗は、回転ヘラ磨きを採用せず、内面を縦方向（放射状）に磨くという固有の特徴があり、その技法を基盤とする托上碗が見られる。この托上碗の高台・突帯の細部形態や調整手法は①～③とは異質である。したがって、①（古相）→②（中相）→③（新相）とした上で、④は同一系譜として後続するVI期古相に位置付けるか、別系譜として併行的にV期中相もしくは新相に位置付けるかの、2通りの可能性があるとしておきたい。⁴³

4. 変遷図

以上の検討を前提として、暫定的に変遷図を示す（第2・3図）。IV・V期をそれぞれ3区分することは妥当であるとの見通しが得られる。しかし細別された区分（古相・中相・新相）の輪郭をより明瞭にするためには、前後のIII・VI期の事例との系譜関係、細別形式の設定、組列を構成する型式の同一期における存否や出現頻度（セリエーション）、資料数の僅少なV期新相相当資料の探究、などの検討作業が必要であり、本稿（5）に向けての課題となる。

5. 想定される年代

4. に示した課題が留保条件となるが、年代の見通しについて記す。想定年代は、当面は共伴した搬入品の年代観に拠るしかない。①ある搬入品の最古共伴例、②ある抽出資料の中での最新の搬入品の存在、をもとに年代を想定する。

IV期の抽出資料には、京都産緑釉陶器が共伴することが多い。高橋照彦氏編年II期（9世紀中葉～後半前半）の最古共伴例は、多肥北原西遺跡SD0501（IV期古相）。同編年III期（9世紀後葉～10世紀初頭）の最古共伴例は、川津東山田遺跡I区SD3109（IV期新相）。したがってIV期古相は9世紀中葉を、IV期新相は9世紀後葉を上限にできる可能性がある。しかし、III期中相の讃岐国府跡第2次第5・6層出土土器は、黒色土器杯（碗）のプロポーションから9世紀前葉に位置付けるのが妥当であり、これに後続するIII期新相（買田岡下遺跡II区南包含層、十瓶山西2号

V期中相の前田東・中村遺跡E区SD19出土土器での最新搬入品は、森隆氏編年のⅢ段階（11世紀初頭～前半頃）に位置付けられる楠葉型黒色土器B類椀である。VI期古相の須恵器鉢D形式（D-1型式）は、大宰府条坊跡第88次SE040で山本信夫編年XⅠ期（11世紀中葉）の土器と共に伴しており、VI期新相（西村1号窯跡）の想定年代との関係からも、VI期古相を11世紀中葉頃に置くことができる。すると、V期中相は上記楠葉型黒色土器B類椀の年代をほぼ当てはめてもよからう。ただし、資料数が少ないながらも土師質土器杯CⅠ・Ⅱ形式、黒色土器B類椀AⅦ形式に明瞭な変化が認められるV期新相がVI期古相との間に介在するため、V期中相の上限は10世紀末葉（後葉前半）まで遡らせた方がよいかもしれない。

V期古相の讃岐国分寺跡SK25・26出土土器での搬入品は、森隆氏編年のI段階（10世紀中頃）に位置付けられる楠葉型黒色土器B類椀と、平安京Ⅲ期古～中（930～980年頃）に位置付けられる篠窯産須恵器捏鉢が手掛かりとなる。特に後者は、畿内や大宰府では11世紀前葉でも一定量の存在が認められる。V期中相の年代観との関係をも踏まえると、V期古相は10世紀後葉を中心と想定しておくのが妥当であろう。上記のようにV期中相の上限が10世紀末葉まで遡ると考えられるので、V期古相の上限を10世紀中葉後半に食い込ませておく。

IV期古相 = 9世紀後葉、V期古相 = 10世紀中葉後半～後葉と捉えることができるならば、IV期中相・新相はその間の年代が与えられると見なすことができる。IV期中相 = 9世紀末葉～10世紀前葉前半、IV期新相 = 10世紀前葉後半～中葉前半としておくのが穩当な見方でないだろうか。2014年度調査の讃岐国府跡32次SK1003は、火災に伴う一括廃棄土坑と推測される遺構で、出土土器はIV期新相に相当する（図版17⁴⁴）。共伴した畿内産黒色土器A類椀は、平安京II期新（900～930年頃）に相当するが、上記のように考えると、一応の整合性をもって捉えることができる。

以上を踏まえると、暫定的に下記のように整理できよう。

IV期古相	9世紀後葉
中相	9世紀末葉～10世紀前葉前半
新相	10世紀前葉後半～中葉前半
V期古相	10世紀中葉後半～後葉前半
中相	10世紀後葉後半～11世紀前葉前半
新相	11世紀前葉後半～11世紀中葉前半

(以下、「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業 (2) 7世紀中葉～9世紀中葉の供膳器種」に続く)

註

- 1 VI～VII期については、既に空港跡地遺跡IVの発掘調査報告書において示した編年案(佐藤2000a)がベースになる。
- 2 「日本建築」を様式史という枠組みに定位させるために、伊東忠太は「法隆寺建築論」を著した。そこで法隆寺金堂・塔・中門を「推古式」とする考え方の前提として、「建築の年代或は共に数拾年或は百年の前後あらん、然れども其形式均しく、其構造法均しく、其一般の建築的性質だに均しくはこれ学術上同時代の建築と云ひて可なるべく、若し一旦にして互に相異ならば其年代全く均しきもこれ学術上別時代の建築と云はざるべからず世の考証家は余之を知らず、建築学上の眼孔只たこの三建築の性質如何を觀察するあるのみ、其何の朝に着手し何の朝に成るやは則はち第二の問題なり」と述べ、「吾人はこの三建築を以て同時代の建築と見做し、之を同一の派流となすに猶予せざるものなり。吾人は其建築落成の期か推古の時代に属するや或ハ和同年代に属するやを知らす、然れども余は之を以て断して。推古派流と名くるに躊躇せざるなり」と表明した。様式と編年/年代が別の問題として扱われていることが分かる。伊東忠太1893「法隆寺建築論」『建築雑誌』第7卷第82号、日本建築学会
- 3 ハインリヒ・ヴェルフリン(海津忠雄 訳)2000(原著1915)『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』慶應義塾大学出版会
- 4 小林行雄の建築家としての経歴は、神戸高等工業学校建築科在籍期を含めても数年(1929～32年、昭和4～7頃)とされるが、この時期はまさしく初期の小林様式論が形をなしていった時であり、建築の仕事との思考的な往来が重ねられた可能性がないのか、一考の価値はある。現段階では筆者はほとんど資料的検討を経ていないので、素描にとどまるが、以下のような点に注目している。
①神戸高工建築科の教授に古宇田実(1929～1945年学校長)、滝澤眞弓(1931～1949年)がいたこと。古宇田は、東京帝国大学建築科を卒業後、建築装飾研究のため洋行。神戸商工会議所(1929年竣工)や神戸元町スズラン灯(1926年竣工)などの設計者で、建築様式史のバイブル的存在の『建築史』(バニスター・フレッチャー、1896初版)の翻訳者としても知られる。また滝澤眞弓は、1920年(大正9)に堀口捨巳・山田守らと分離派を結成し、過去の建築様式に縛られない独自の建築表現を目指した。創作の場において、小林は建築様式の継承者と超克者に接する環境に身を置いていたことになる。もっとも滝澤ら分離派も、超克すべき過去の様式については芸術性という点で一家言持つており、様式についての造詣は深かった。建築様式を踏まえた上での肯定・否定の選択を自ら行つたと見られる。②卒業後に「大阪市内の建築事務所に勤め」設計を担当した新井邸(1932年竣工)。小山田宏一2003『弥生文化研究への熱いまなざし 森本六爾、小林行雄と佐原真』大阪弥生文化博物館はロマネスク様式風建築であり、関西でのロマネスクの盛行(古宇田も神戸商工会議所でロマネスクを試みている)に倣つたとしても、細部装飾への過度ともいえるこだわりが看取できる点が特徴的である。小山田2003でも指摘されているが、「私はつとめて過去の建築様式を参考し、装飾の多い設計をするようにした」(小林行雄1983「わが心の自叙伝」『考古学一路』平凡社)という証言を地で行くような作品である。小林の世代の建築家は、丹下健三(1913～2005年)に代表されるように欧米でのモダニズム第2世代(ル・コルビュジエ等)の影響を理論的にも強く受けしており、歴史主義建築=様式は捨て去るべきものとの認識が大勢を占めていたと考えられる。建築家としての小林の立ち位置を明らかにすることは、考古学研究においても重要な視座を得ることになろう。
- 5 後述するように共有派生的と思われる属性をもつ類似した形態・技法の一群を「形式」と捉え、その細別単位を「型式」とし、それらの系統を示す配列を「型式組列」とする。したがって「形式」は、「型式組列」によって時間的構成のあり方が示されることになる。
- 6 ただし、焼物の組み合わせに見る様相の変化を、時代区分(古代/中世/近世/近代)に連動させて理解しようとする試みは、かなり一般的に行われている。
- 7 佐藤竜馬1996「国分寺楠井遺跡の成立—中世前期土器生産の変容—」『中近世土器の基礎研究』X I、日本中世土器研究会
佐藤竜馬2000b「西村型土器の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』VII
当事者の意識が、モノ資料としての土器の解釈の絶対的な要件となるのではないとは考える(註8参照)ことを前提にした上での経験談を記す。香川県内で2000年代まで焙烙等を生産していた二つの生産地(高松・御厩、三豊・岡本)は、後述するX II期からの生産が辿れるが、最終段階での焙烙の焼成は御厩が瓦質、岡本が土師質と全く異なっていた。しかし生産関係者はお互いの焼成の違いについて、ほとんど無意識的(というか「それが当たり前」式の感覚)であり、自作製品の焼成にはそれぞれの流儀に固く拘つていたが、他者との違いに格別な意味を認めていなかったように筆者には見受けられた。焼成で区分したがる考古学研究者とは異なる「まなざし」をもっていたことは間違いないであろう。ちなみに御厩と同系統の生産地大原(1980年代頃まで生産)は土師質であるが、当事者は系譜関係に全く無自覚であった。
- 8 三中信宏1997『生物系統学』東京大学出版会
- 9 ある程度総合された形ではあるが系統をビジュアルに示したのは、1943年(昭和18)の唐古(・鍵)遺跡の発掘調査報告書を嚆矢とするようである。ところでこれに関連して、しばしば用いられる電車の系統図(寺沢1989「様式と編年のありかた」)『弥生土器の様式と編年 近畿編 I』木耳社)は、電車の製造・運行の当事者が把握する分類認識であるが、考古学的に見てこの分類のみが唯一というわけではないことに注意する必要がある。

- 10 かかる意味で、1980年代後半の近江における古代土器の系譜関係を論じた森隆氏の一連の論考（森隆1986「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ、日本中世土器研究会/森隆1988「近江地域出土の古代末期の土器群について」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ）のような視点に学ぶ今日的意義があると考える。
- 11 長井博志氏による東讃地方の中世土師質土器変遷の検討では、在地土器を分析対象としているが、①分類が個別完結的に行われ、系譜関係の認識が明確でない、②年代が推定可能な搬入品（讃岐内外問わず）の年代観を前提にして複数資料の共伴関係を想定している（搬入品の年代判定にも問題を残す）、という2点で、様相把握への方法上の問題を指摘せざるを得ない。長井博志2003「東讃地域の土師器の変遷」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第45冊 天王谷遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 12 古代（飛鳥時代）以降について、日本の考古学研究で「歴史時代」と呼称されることがある。1960年代に発行された『日本の考古学』全7巻において「歴史時代」と呼称されるのがその典型の一つで、1980年代までかなり頻繁に使用され、考古学研究の対象が古代・中世・近世と細分化されるにしたがい、次第に使用されなくなったようである。「先史時代」あるいは「先史考古学」の研究が盛んになって初めて、古文書等の文字資料に依拠した既存研究が先史時代から逆照射・相対化されて出てきた用語であると思われる。「歴史時代」の呼称がなお有効性をもつかどうかははなはだ疑問であるが、7世紀以降の考古学研究における時代区分（飛鳥・奈良・平安・鎌倉……、古代・中世・近世・近代）は既存の概念への当てはめに過ぎず、考古学独自の時代区分を必要とするか否かが議論されない限り、どのような名称を用いようと「歴史時代」という呼称を超克したことにはならないであろう。
- 13 例えば③（古墳時代タイプの蓋杯）。i) 口径の縮小化、ii) たちあがりの短小化、iii) 底部調整（回転ヘラ削り）の省略化、といった傾向が顕在化するのがこの時期であるが、（a）口径が縮小化せずに ii・iii が顕在化する個体、（b）底部調整が省略されずに i・ii が顕在化する個体、などが存在する。これらをある一定幅をもたせた概念上の振れ幅と見なすのか、有意な地域色と見なすのかについては、もう少し事例の増加を待った方が良いかもしれないが、（a）については生産地の特定作業と並行する形で地域色として指摘できる可能性をもつと考える。
- 14 佐藤竜馬1989「香川県における7世紀の須恵器」『椋の木古墳・大石北谷古墳発掘調査報告書』長尾町教育委員会
片桐孝浩・佐藤竜馬1997「四国地方における7世紀の土器」『古代の土器研究—律令の土器様式の西・東5 7世紀の土器』古代の土器研究会
- 15 信里芳紀2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」『高松東ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塙谷古墳』（財）香川県埋蔵文化財センターほか
- 16 呼称の問題であるが、「土師器」にせよ「土師質土器」にせよ無条件にニュートラルな立場で使用することはできない。この用語については最短でも1970年代以来の用語をめぐる議論があり、「須恵系土師質土器」「土師質土器」「回転台土師器」「ロクロ土師器」などの名称は、そうした議論と無関係ではない。要はその土器に対する系譜的な理解が含意されているわけで、単に「素焼き（土師質）だから土師器でよい」ということにはならない。それであれば、そもそも古代史料に記載された実態不明な焼物呼称を探るのを止めて、「素焼き土器」あるいはもっとシンプルに一般的現代用語「土器」にして、縄文～現代の「土器」を統一的に捉えたらどうか。
- 17 片桐孝浩1997「讃岐出土の東北系土器について—とくに黒色土器について」『（財）香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要』Ⅲ松村一良2013「西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について—豊前・筑前・筑後・肥前4国の事例を中心にして—」『内海文化研究紀要』広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設
- 18 田中琢1967「畿内と東国」『日本史研究』第90号、日本史研究会。黒色土器以外にも、例えば6世紀代における須恵器杯模倣の土師器が北部九州～瀬戸内のエリアと、関東周辺（鬼高式）に認められることなど、畿内周辺地域を除く東国と西国との共通要素を見出すことができ、これらを蝦夷移配で理解することは困難であろう。
- 19 山本信夫2005「加賀における律令の土器様式の転換期と編年の検討：九州から見た金沢大学角間遺跡出土の古代土器分析に暗する視点」『金沢大学文化財学研究7』金沢大学
- 20 佐藤2000aでは、椀A II形式の出現を中世I期（本稿でのVI期）の指標としたが、前田東・中村遺跡E区SD19出土例の確認によって、同資料を「その変化の起点に位置付けることは可能であり、西村型土器椀は先行する非十瓶山窯産黒色土器を直接の祖形として成立したと捉えておきたい」と考えるに至った（佐藤2000c）。このため本稿では、椀A II形式の出現をV期のうち（後述するようにV期中相）に捉えておく。ただし、生産地が西村遺跡に集約され、中世須恵器を構成する一形式として変容していく過程に鑑み、VI期以降の碗A II形式に対して「西村型土器椀」という概念を適用させることは、現在でも妥当であると認識している。
- 21 当然ながら土器椀に代わる漆器椀の存在が問題となるが、IX・X期の出土事例はまださほど多くなく、今後の課題とせざるを得ない。
- 22 乗松真也2004「14～15世紀の土師質土器杯編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6刷 濱ノ町遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか、はⅧ期からの系譜関係を念頭に置きつつ上記課題に取り組み、一定の成果を挙げている。ただし、杯と皿との形態的な区分の仕方や、15世紀中葉以降（乗松氏のいう7段階）の内容や年代比定にお問題を残して

いると考える。

- 23 口縁部の外側に取手を貼付する点では「外耳」鍋的だが、吊るすための円孔が内面側に開けられており「内耳」的である。讃岐全域のほか、阿波でも存在が確認される。
- 24 小川賢2000「片原町遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報 平成12年度』香川県教育委員会
- 25 佐藤竜馬2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 26 上記佐藤2003文献および松本和彦2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 27 「近現代考古学」における土器・陶磁器編年の必要性を問題にする以前に、前近代の土器・陶磁器がいかにして現代へと繋がっていくのかを見通すことができない資料的欠落状況に、ある種の感慨を覚える。考古学研究者にとって、対象とする時代や分野を考察し研究する、という行為は、現代人としての自分自身にとってどのような意味をもつであろうか。
- 28 肥前などの既存生産地での近代的技法(銅版転写、鋳込み等)の普及は、概ね20世紀に入ってからのようであり、それに加えて洋式食器の普及と、土器(在地・搬入を問わず)の限定的・補完的な固定をもって現在に続く近代的な土器・陶磁器様相と捉えたい。
- 29 典型的な様相という設定を行うのであれば、A～D群と α ～ ε 群の差異を整合させることも可能であろう。例えば典型様相1=Ⅱ期新相、典型様相2=Ⅴ期中相、典型様相3=Ⅶ期中相、典型様相4=Ⅹ期、典型様相5=ⅩⅡ期古相、という形での典型例の提示である。しかし典型様相1=古代前期土器、典型様相2=古代後期土器・陶磁器、典型様相3=中世前期土器・陶磁器、典型様相4=中世後期土器・陶磁器、典型様相5=近世土器・陶磁器と見なすには、年代的枠組み以外の要素において、なぜそれが古代/中世/近世の特徴の表出と見なせるのかという点を自覚的に説明する必要があるし、それが「土器・陶磁器はそれ自体から」式に説明できるかどうかも、一度は疑ってみた方がよいであろう。
- 30 高松市多肥上町所在。旧香河郡多配郷
- 31 綾歌郡綾川町所在。旧阿野郡甲知郷。
- 32 丸亀市郡家町所在。旧那珂郡郡家郷。
- 33 坂出市川津町所在。旧鵜足群川津郷。
- 34 坂出市川津町所在。旧鵜足群川津郷。
- 35 三野・高瀬窯跡群(従来、三野窯跡群・高瀬末窯跡群・瓦谷窯跡とされていた窯跡群に加え、高瀬町史編纂に伴う分布調査によって存在が明らかにされた複数の窯跡群の総称として提唱された(大山眞充2005「古代の窯業」『高勢町史 通史編』高瀬町)。本稿でもこれにしたがいたい。その地理的区分(支群設定)や変遷過程、結果として分布域に包括される宗吉瓦窯跡群との関係等、なお今後の課題は多い。このうち平見第1地点(窯跡)ではⅣ期中相と思われる須恵器杯が採集されている。また讃岐西端の大坪窯跡(観音寺市豊浜町)は、讃岐・伊予の国境をなす金見山・大谷山塊の讃岐側にあり、伊予側でも須恵器窯跡が3基知られているため、同一生産地を構成する可能性もある。大坪窯跡採集須恵器(松本敏三・岩橋孝1985「香川家古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』)は、Ⅳ期新相と考えられる。この時期の十瓶山窯製品は固有の特徴をもつが、平見第1地点・大坪窯跡とともに実測図から判断する限りでは十瓶山窯製品と共通した形態的特徴をもっているようである。
- 36 高松市国分寺町所在。旧阿野郡新居郷。
- 37 森隆2000「楠葉型黒色土器B類椀と初期楠葉型瓦器椀」『中近世土器の基礎研究 X V』日本中世土器研究会、四条畷市の報告書を直接参照できていない。また、平安京Ⅲ期古の土師器皿との共伴関係がそのまま楠葉型黒色土器B類椀Ⅰ段階の年代を示すかどうかかも検討の余地はあろう。したがって、孫引き的な年代参照となる讃岐国分寺跡SK25・26出土土器が、そのまま平安京Ⅲ期古に年代的にスライドかするかどうかは、微妙なところである。
- 38 高松市前田東町所在。旧山田郡宮処郷。
- 39 宮崎哲治2001「農林事業等予定地内の調査」『埋蔵文化財試掘調査報告X IV 香川県内遺跡発掘調査』香川県教育委員会
- 40 報告者の森格也氏は、前田東・中村遺跡E区SK04出土土器をSD19出土土器に先行する資料と見なし、SD19出土土器を讃岐国分寺跡SK25・26と同時期としている(森格也1995「前田東・中村遺跡の平安時代の土器」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか)。森氏の所見は、共伴した黒色土器などの搬入品の年代観や遺構の分布状況を根拠としている。筆者は杯C形式で想定される変遷過程から国分寺SK25・26→前田東・中村SD19→同SK04が妥当と考える。(3)で検討予定であるが、SK04に埋納されていた十瓶山窯産須恵器広口瓶(壺C形式)の出現を考えるにあたって

- も、SK04の編年的位置付けは重要な作業となる。
- 41 例えばA II形式は緑釉陶器椀、A V形式は楕葉型黒色土器椀あるいはIV式新相のA IIIの系譜を引くと理解することもできるかもしれない。
- 42 宮崎哲司2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第55冊 前田東・中村遺跡』香川県教育委員会ほか
- 43 石田遺跡SK11出土土器は、土師質土器杯の直接的な比較は難しく、杯A形式近似の特徴(器壁の薄さ、底部の突出気味)はIV式新相に近い要素をもつが、それでは深椀形の黒色土器A類椀の出現が讃岐中央部よりも先行することになる。黒色土器椀の存在をもって、V式古相もしくは中相まで下げるという選択肢もあるが、土師質土器杯の特徴とはやや齟齬をきたすように思われる。現実的には、西讃地域での事例の蓄積を待つしかないが、当面は石田遺跡SK11出土土器を折衷的にV式古相併行と捉えておきたい。
- 44 讃岐国府跡発掘調査平成26年度概報に掲載予定。本稿掲載の図面は信里芳紀氏作成。

主要参考文献

- 片桐孝浩1992「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大東川改修工事(津の郷橋～弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』関西大学
- 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18冊 国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2000a「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2000b「西村型土器椀の系譜」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要VIII』
- 2000c「讃岐における平安期の土器研究」『中近世土器の基礎研究X V』日本中世土器研究会
- 2003「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡(西の丸町地区) II』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 松本和彦2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 高松城跡(西の丸町地区) III』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 乗松真也2004「14～15世紀の土師質土器杯編年」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 浜ノ町遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 2015『県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原西遺跡』香川県埋蔵文化財センターほか
- 香川県教育委員会1968『香川県陶邑古窯跡群発掘調査報告』
- 片桐節子1994『十瓶山窯跡群すべっと支群—綾南町総合運動公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』綾南町教育委員会
- 和田素子1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12冊 郡家一里屋遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 山元素子2000『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第38冊 川津東山田遺跡I区』(財)香川

県埋蔵文化財調査センターほか

藤好史郎・西村尋文・大久保徹也1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』(財)香

川県埋蔵文化財調査センターほか

松尾忠幸1987『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会

森格也・古野徳久1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 前田東・中村遺跡』(財)香川

県埋蔵文化財調査センターほか

古代の土器研究会1992『古代の土器1 都城の土器集成』

1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』

高橋照彦1995『緑釉陶器』『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

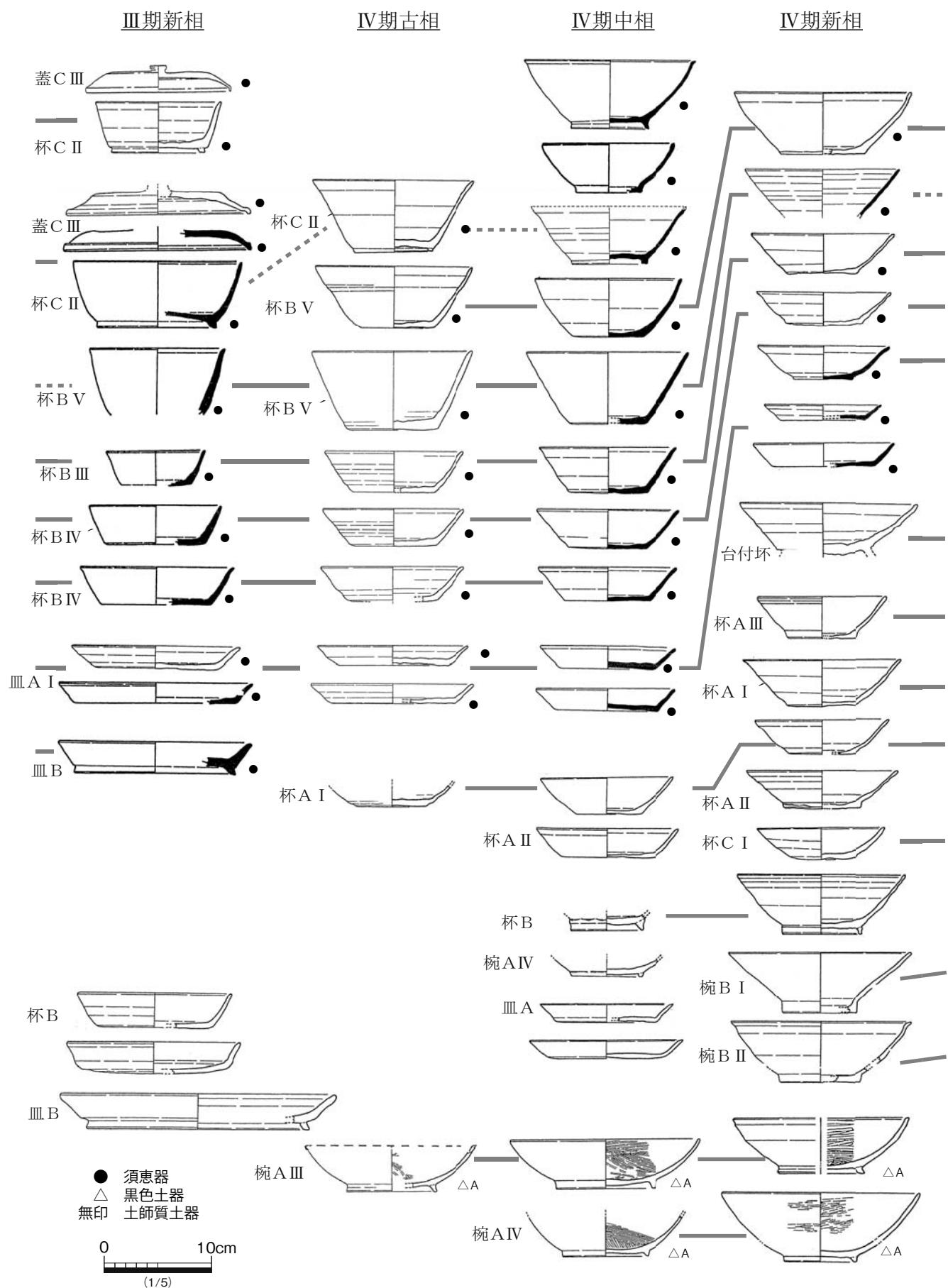
森隆2000 「楠葉型黒色土器B類椀と初期楠葉型瓦器椀」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会

上田秀夫1082「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

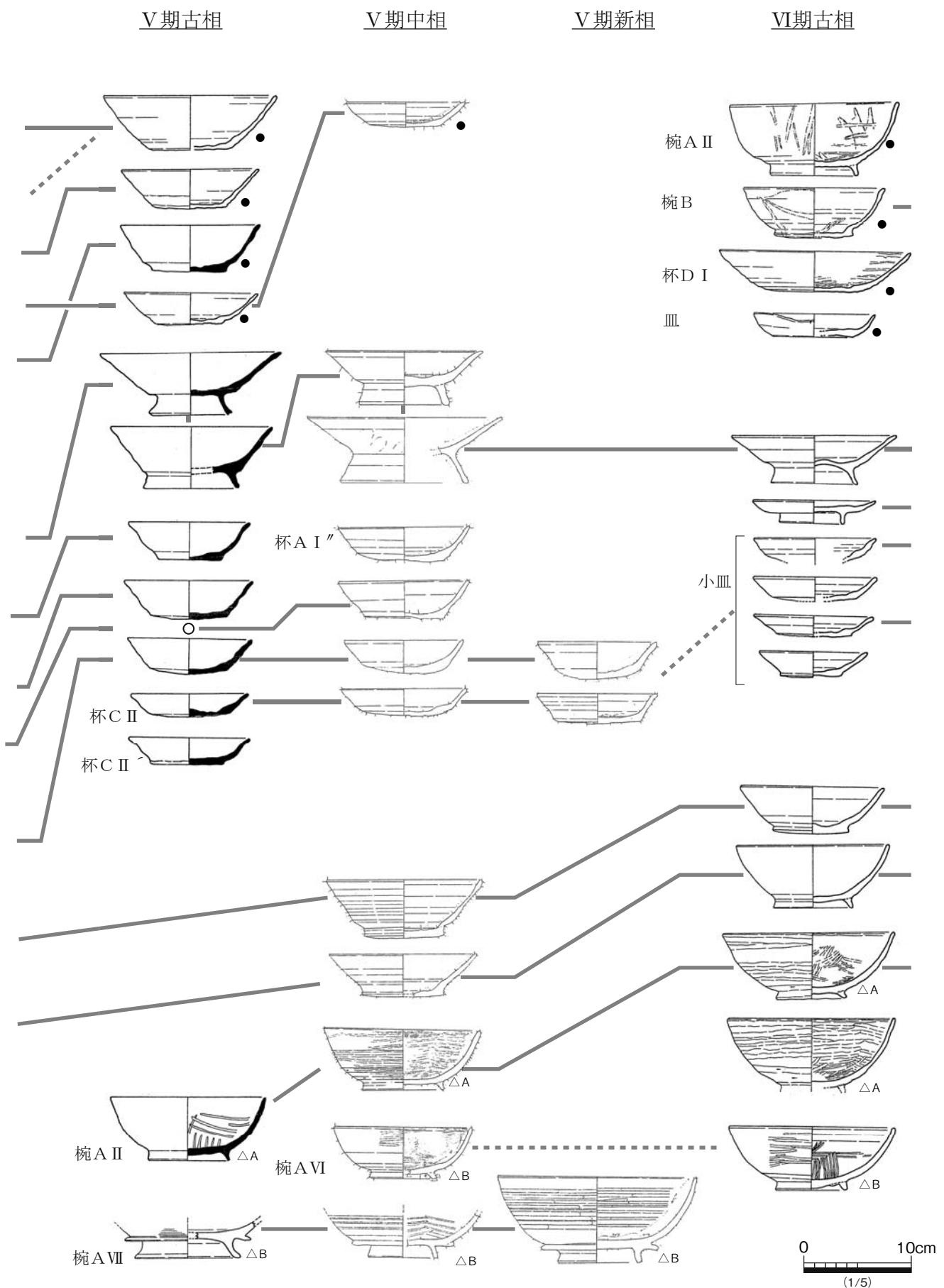
森田勉1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』日本貿易陶磁研究会

本稿(1)をなすにあたり、平尾政幸(京都市埋蔵文化財調査研究所)、大久保徹也(徳島文理大学)、渡邊誠(高松市埋蔵文化財センター)、乗松真也(香川県教育委員会生涯学習・文化財課)、信里芳紀(香川県埋蔵文化財センター)各氏の御教示・御協力を得た。真鍋貴匡・竹内裕貴両氏(香川県埋蔵文化財センター)には、煩雑な図版のデジタル処理に御協力いただいた。以上の各氏に感謝申し上げる。

(2015年8月13日稿了)



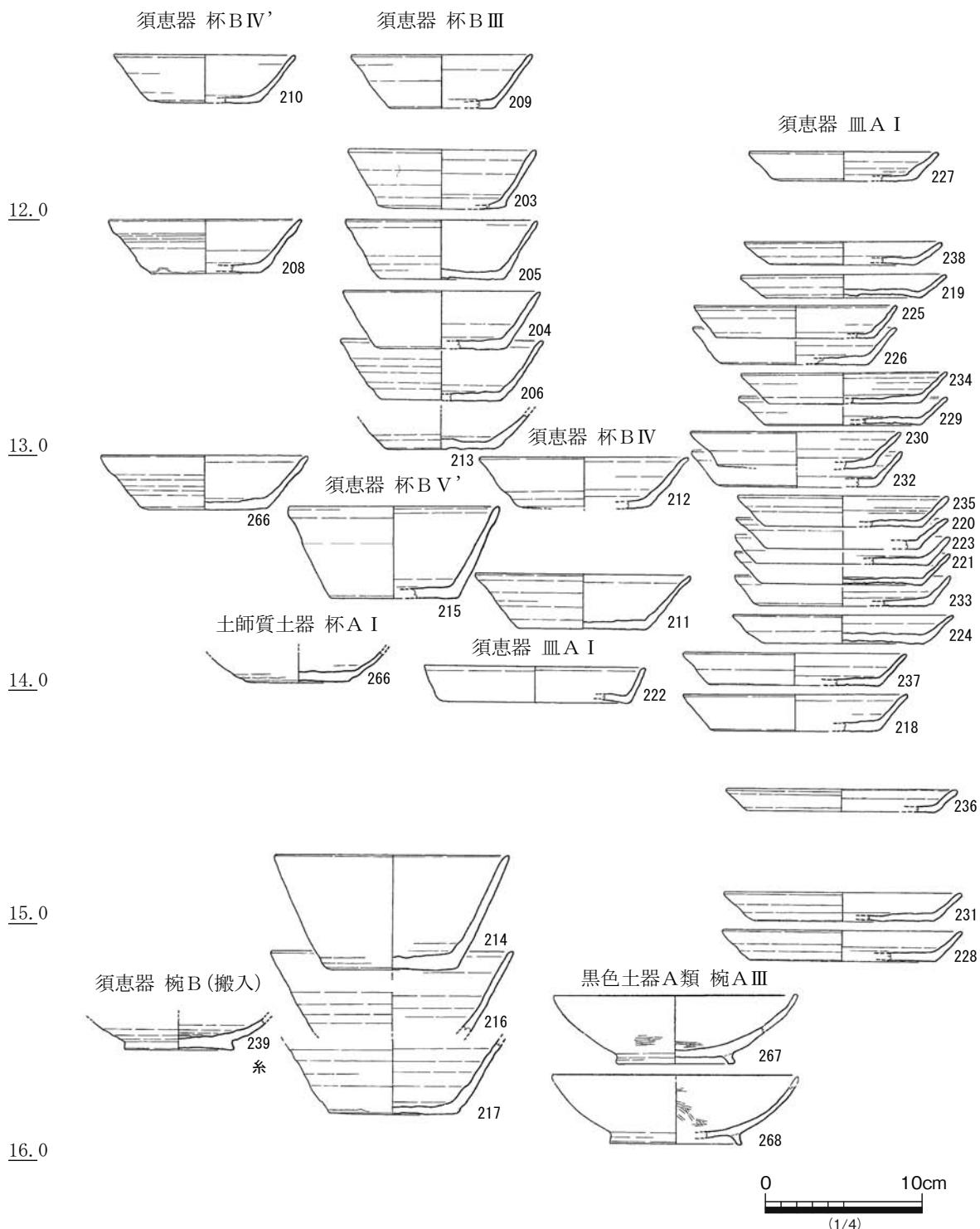
第22図 IV期変遷図 (暫定版)



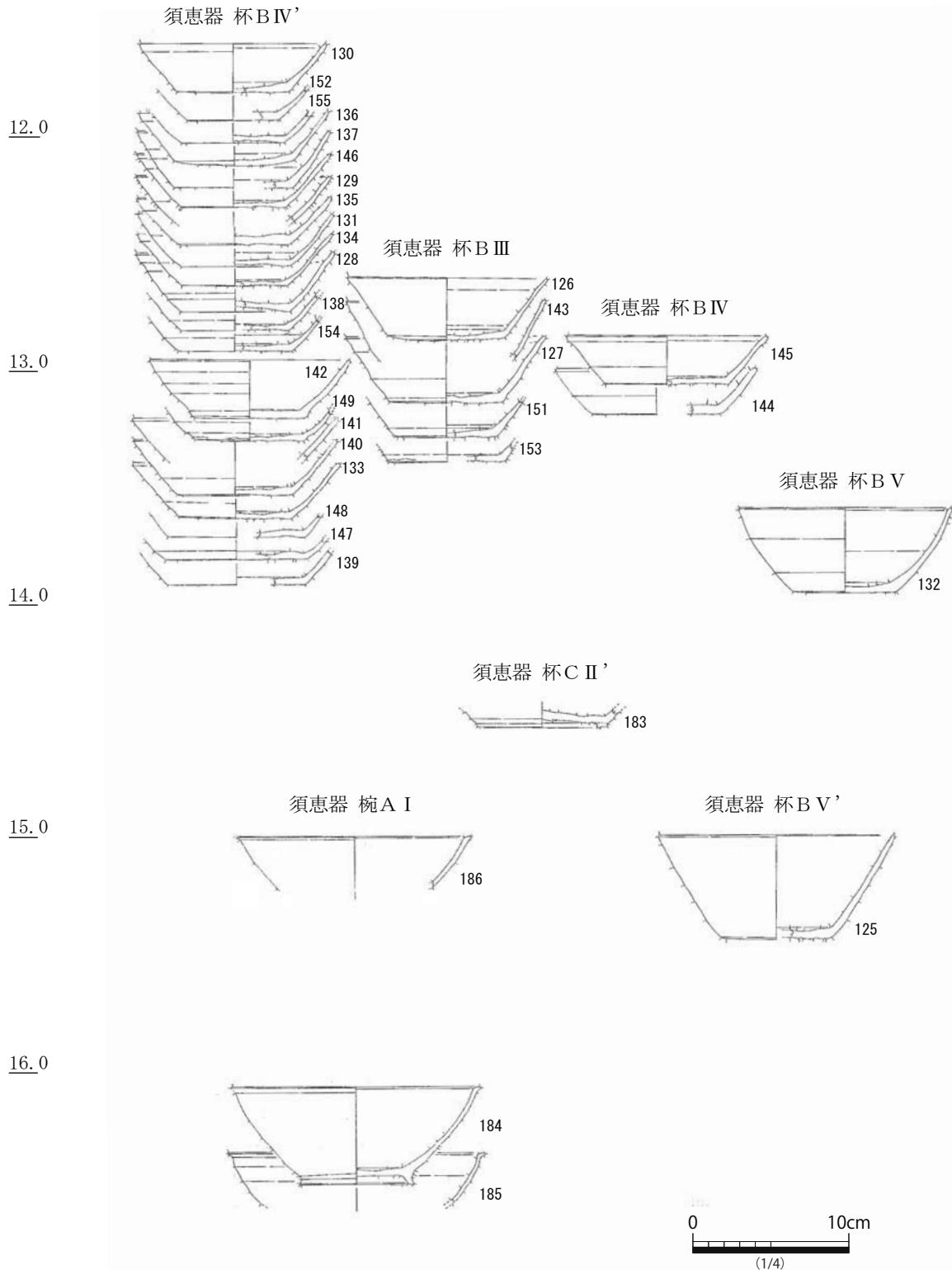
第23図 V期変遷図（暫定版）

口径
11.0 (cm)

IV期古相



図版1 多肥北原西遺跡 S D 0501

11.0 (cm)

図版2 郡家一里屋遺跡 SD12 (1)

口径

須恵器 皿

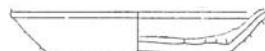
12.0 (cm)



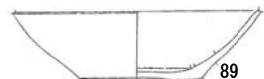
IV期中相

13.0

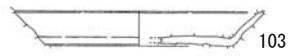
須恵器 皿A I



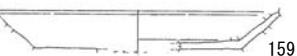
土師質土器 杯A I



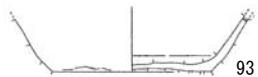
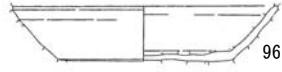
土師質土器 皿A



14.0



土師質土器 壺A II

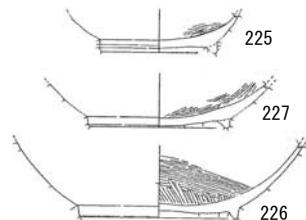


15.0

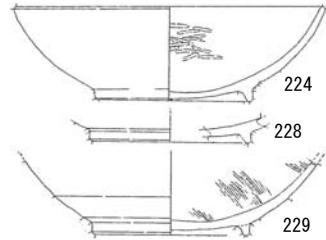
土師質土器 梗A IV



黒色土器 A類 梗A IV



黒色土器 A類梗A III

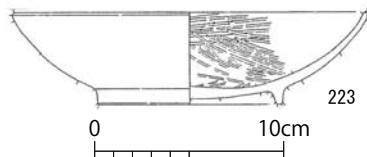


16.0



17.0

土師質土器 梗A III



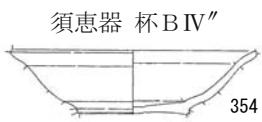
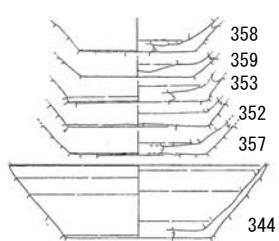
図版3 郡家一里屋遺跡 S D12 (2)

口径

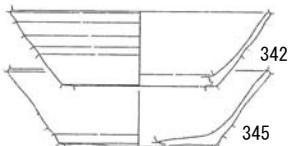
IV期新相

12.0 (cm)

須恵器 杯 B IV



13.0



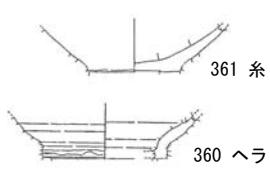
須恵器 杯 B III



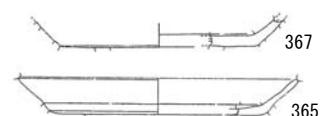
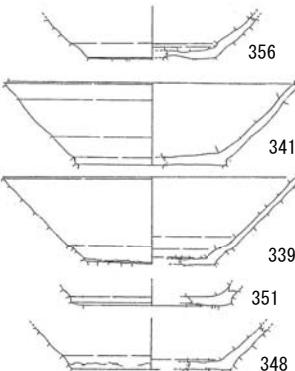
14.0



須恵器 梶 B (搬入品)



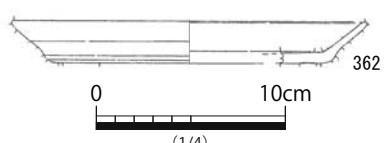
15.0



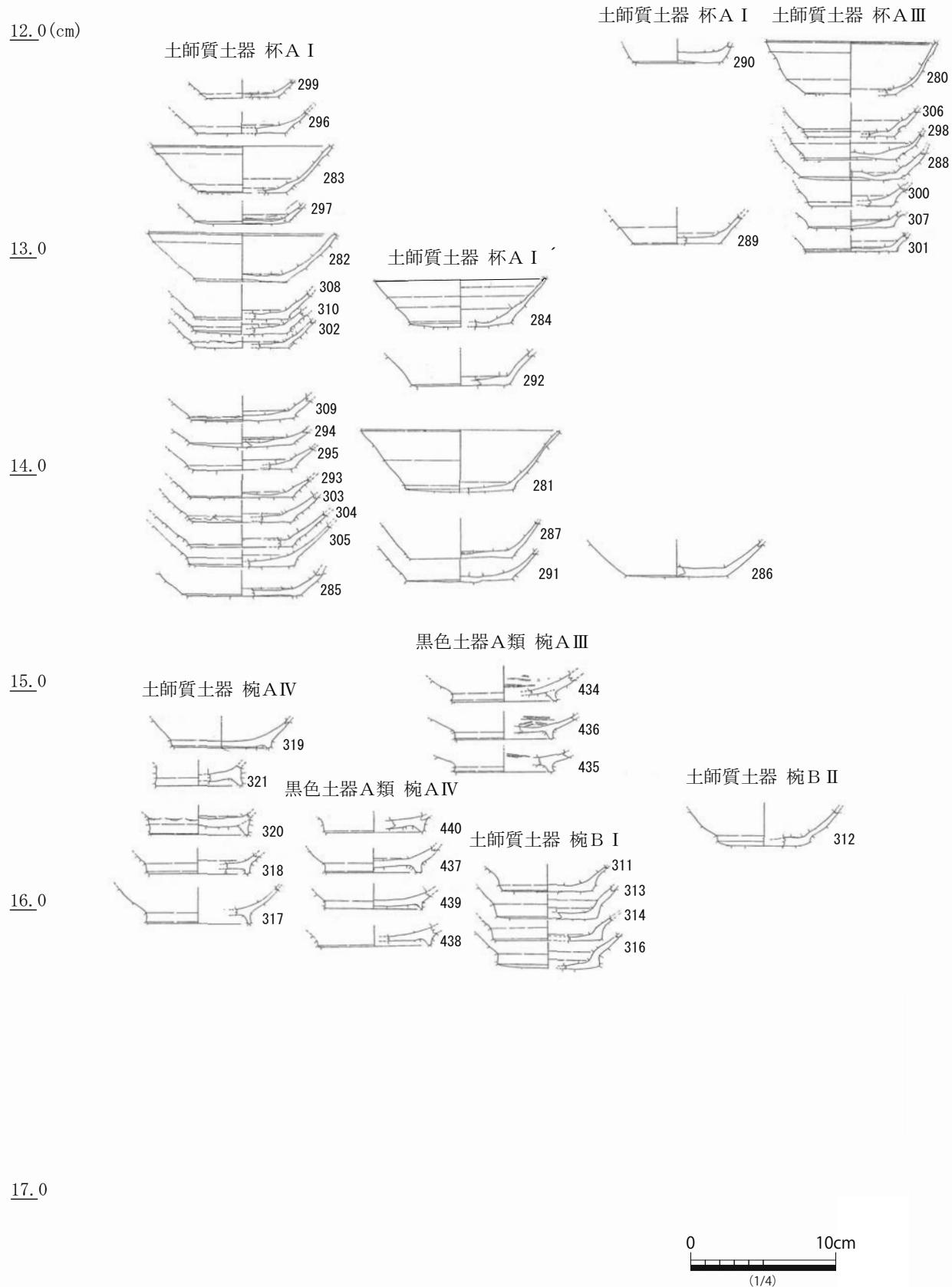
16.0



17.0



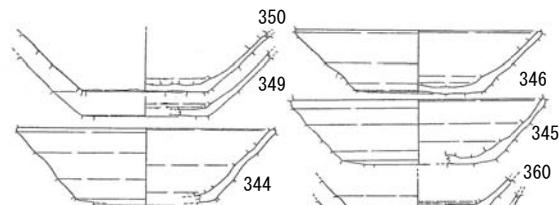
図版4 郡家一里屋遺跡 S D13 (1)



図版5 郡家一里屋遺跡 SD13 (2)

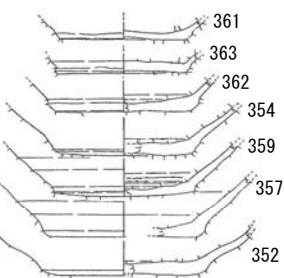
11.0 (cm)12.0

土師質土器杯A I

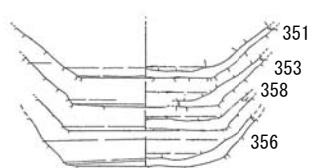
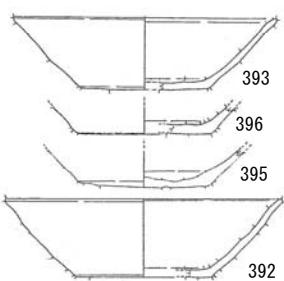


土師質土器杯A I

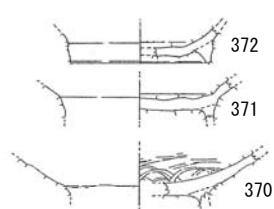
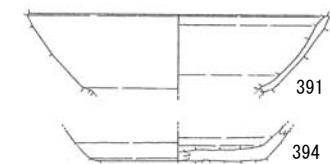
土師質土器杯A III

13.0

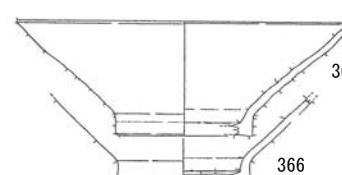
須恵器杯B III

14.0

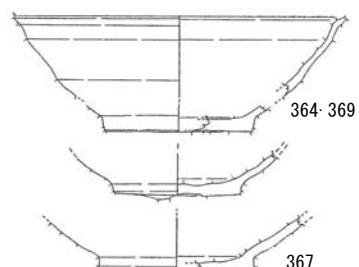
土師質土器杯A IV

15.016.0

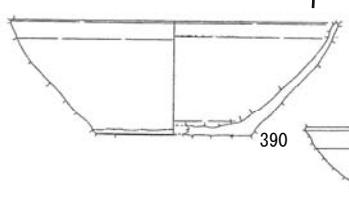
土師質土器椀B I



土師質土器杯B II

16.0

須恵器杯B V



須恵器椀A I



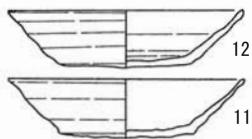
図版6 川津東山田遺跡 I区S D3109

口径

IV期新相

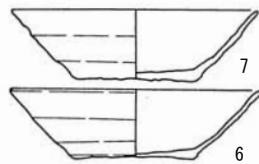
12.0 (cm)

須恵器 杯 B IV'

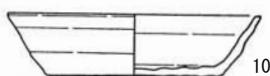


13.0

須恵器 杯 B III

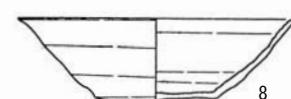


須恵器 杯 B IV



14.0

土師質土器 杯 A I'



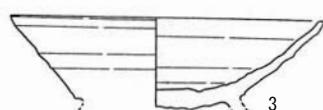
15.0

黒色土器 A類椀 A IV



16.0

台付杯



図版7 下川津遺跡 第2低地帯 流路2

口径

IV期新相

11.0 (cm)

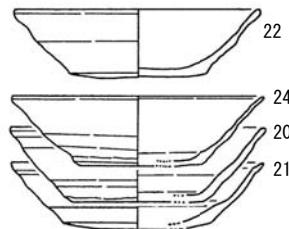
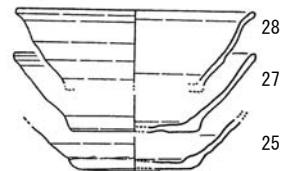
12.0

須恵器 杯 B IV

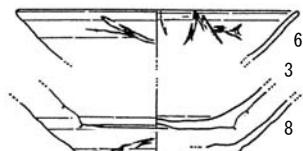
13.0

土師質土器 杯 A I

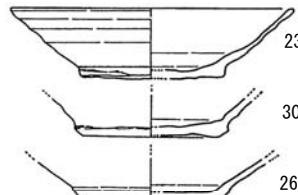
土師質土器 杯 A III



14.0

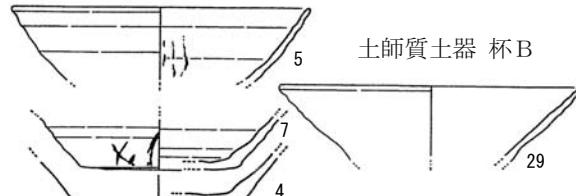


土師質土器 杯 A II



須恵器 杯 B III

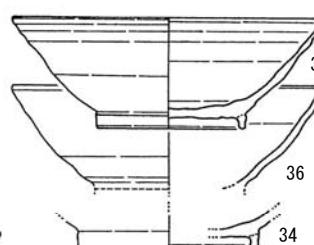
15.0



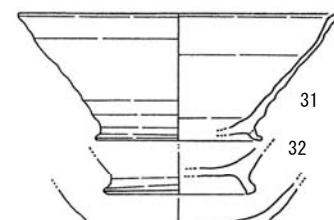
土師質土器 杯 B

16.0

須恵器 杯 B V



土師質土器 杯 B



0 10cm
(1/4)

図版8 下川津遺跡 SEIII04 (1)

口径

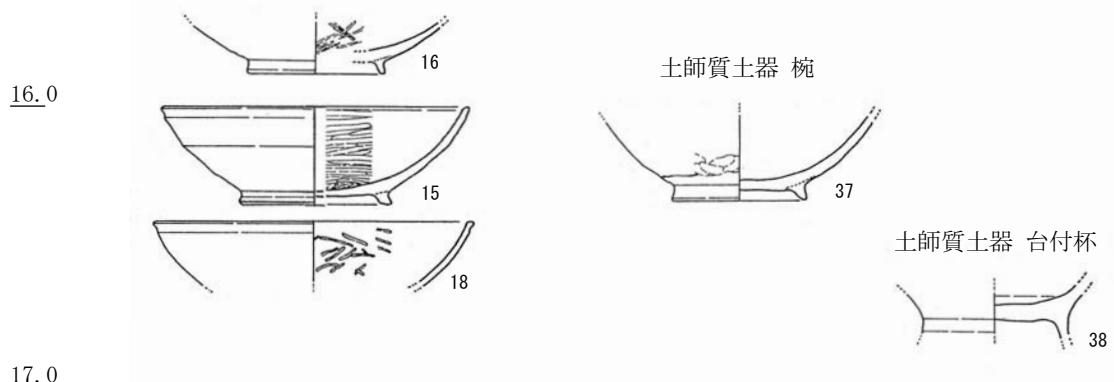
IV期新相

13.0 (cm)

14.0

15.0

黒色土器 A類椀A III



17.0

18.0

黒色土器 A類椀A IV



図版9 下川津遺跡 SEIII04 (2)

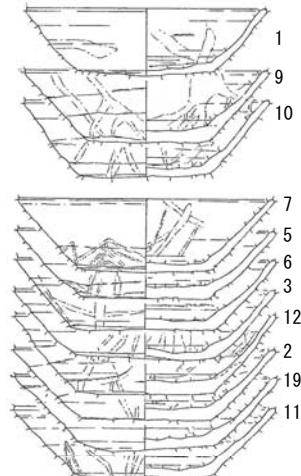
口径

V期古相

11.0 (cm)

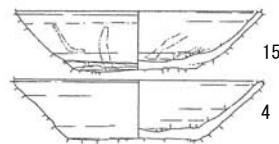
12.0

須恵器 杯B III



13.0

須恵器 杯B IV



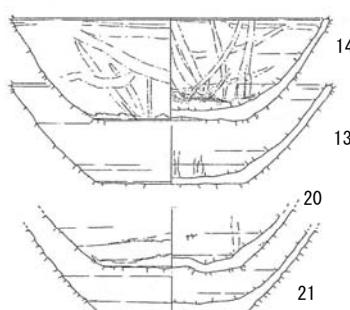
14.0



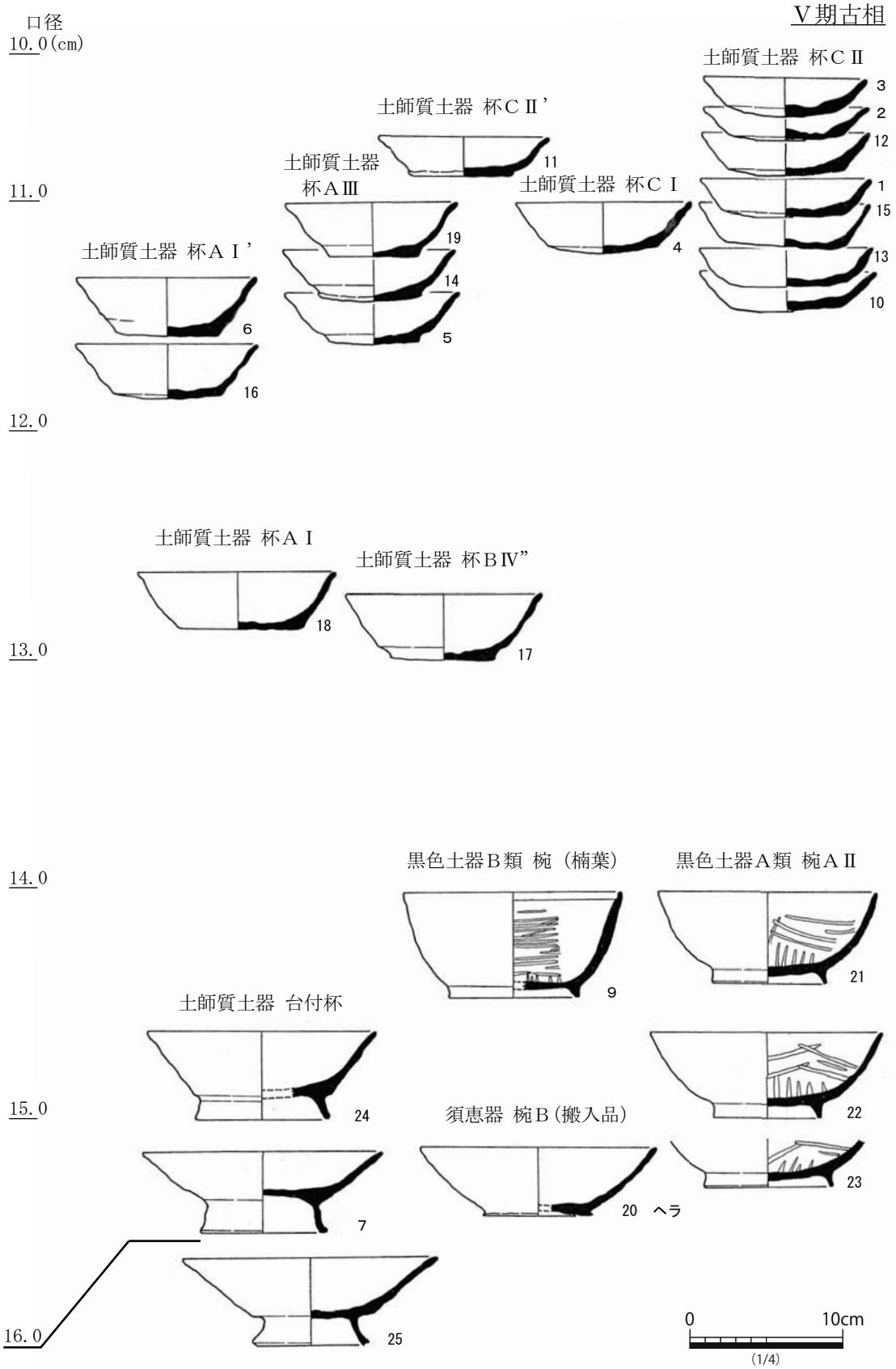
15.0

須恵器 杯B V

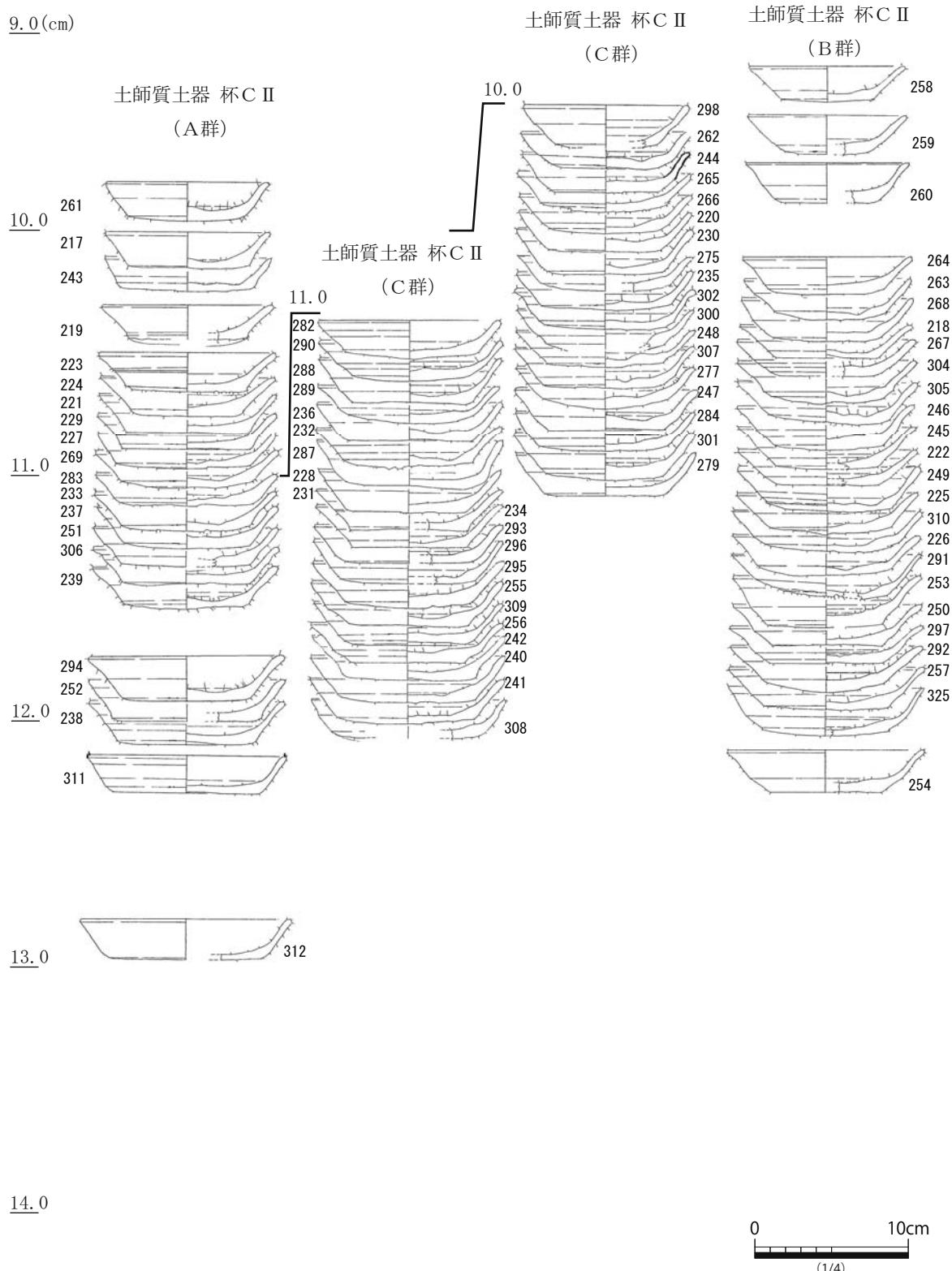
16.0



図版10 深池窯跡 灰原



図版11 讀岐国分寺跡 SK25・26



図版12 前田東・中村遺跡 E区S D19 (1)

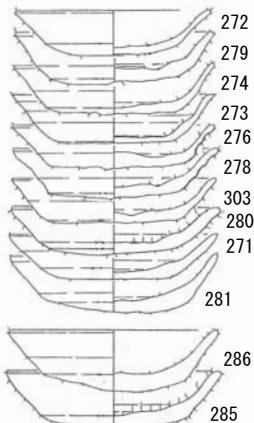
口径
9.0 (cm)

V期中相

須恵器 杯C I

10.0

(D群)



須恵器 杯B IV'



11.0



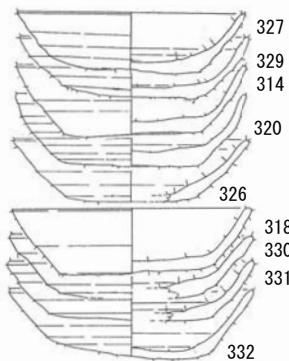
須恵器 杯A I

(F群)

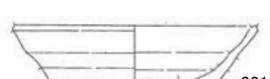


須恵器 杯A I "

(E群)



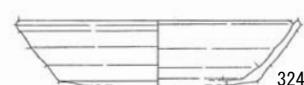
13.0



14.0



中世



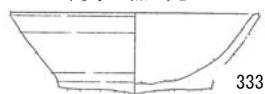
図版13 前田東・中村遺跡 E区 S D19 (2)

口径

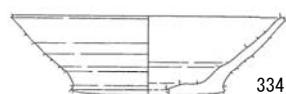
V期中相

12.0 (cm)

土師質土器 梢B II

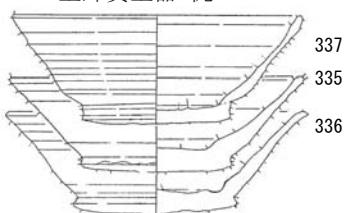


13.0



14.0

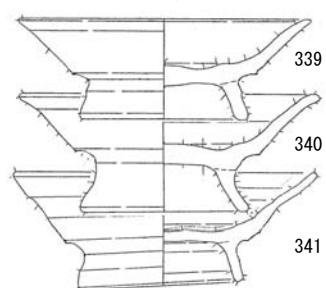
土師質土器 梢B I



15.0

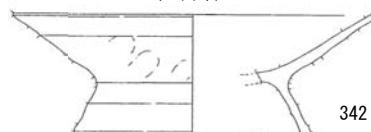


台付杯



16.0

台付杯



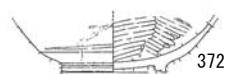
図版14 前田東・中村遺跡 E区 S D19 (3)

口径

V期中相

11.0(cm)

黒色土器 A類椀A II(浅手)



12.0

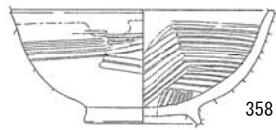
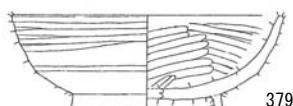
黒色土器 B類椀A VI(深手)



13.0



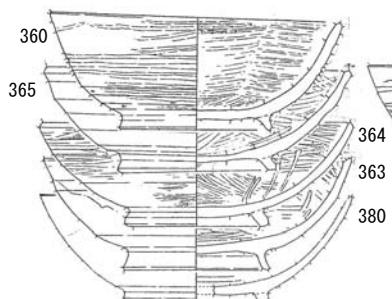
黒色土器 A類椀A II(深手)



14.0



15.0



楓葉型黒色土器椀



黒色土器 B類椀 A VI(浅手)

16.0

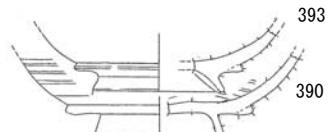
黒色土器 A類椀A V



黒色土器 B類椀 A VII



17.0



図版15 前田東・中村遺跡 E区SD19 (4)

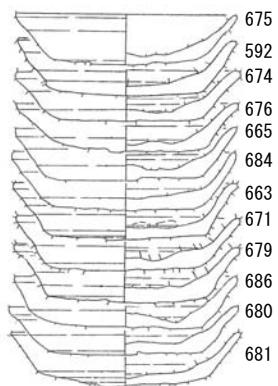
口径

V期新相

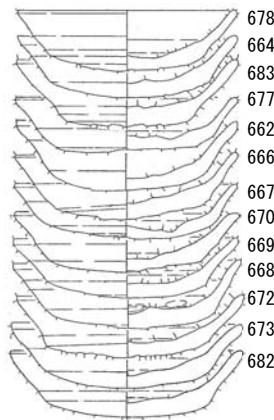
9.0 (cm)

10.0

土師質土器 杯C II
(C群)



土師質土器 杯C I
(D群)



11.0

12.0

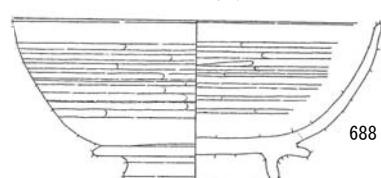
13.0

土師質土器 坯C II
(A群?)



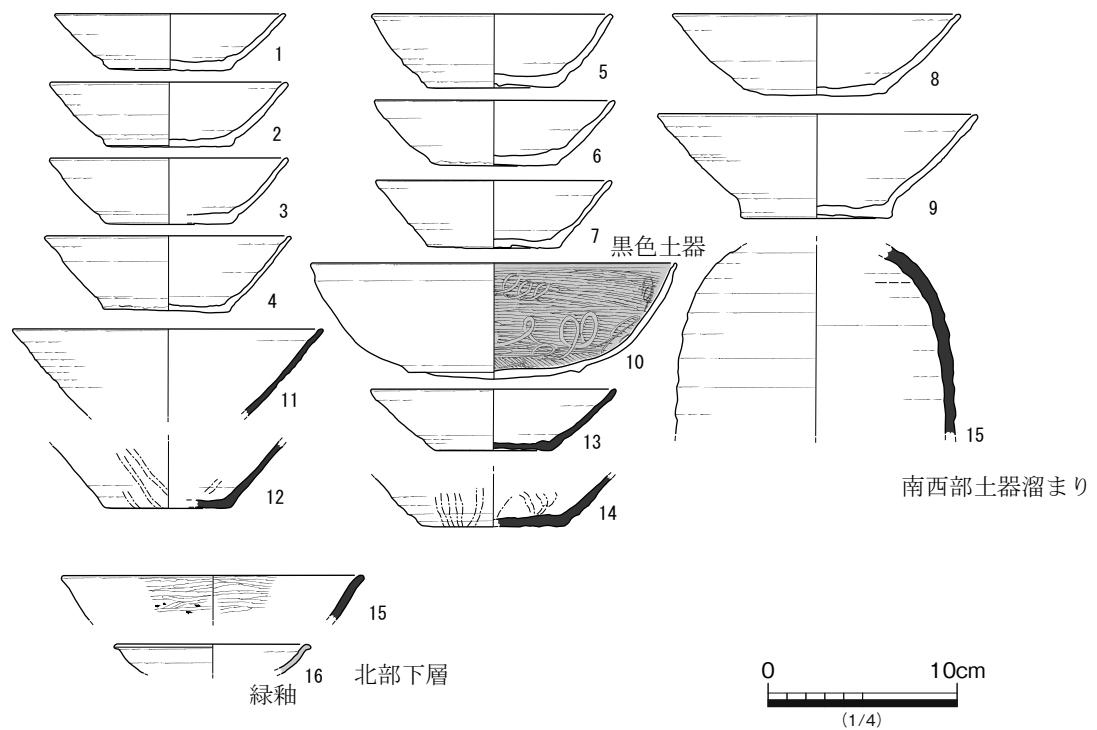
14.0

黒色土器 B類椀A VII



図版16 前田東・中村遺跡 E区SK04

IV期新相



図版17 讃岐国府跡32次1トレンチSK1003